43036
教科書文庫
4
236
42-19/3
20000
80137

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

教科書文庫
4
236
42-19/3
20000

資料室

教科書文庫
4
230
42-1913
2000080137

二、公くつどの事蹟

三十六軍の年代と其の第御旨

権の盛なりしは何頃なりしか

4b
230
大3

子女

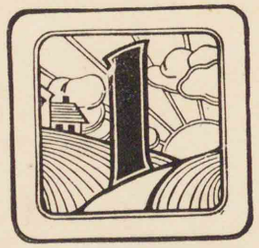
西洋史教科書

第四年制度用

東京女子高等師範學校教諭

富士德治郎

著



愛成社

広島大学図書

2000080137

例言

一、本書は、第四年制度の高等女學校の教科書に供せんために編纂せり。なほ第五年制度の高等女學校用としては、別に編纂せる女子西洋史教科書あり。故に兩者の區別をなさんが爲に、本書には第四年制度用の名を附せり。

一、本書の要目は、主として高等女學校教授要目に準據し、其の材料は、著者が東京女子高等師範學校附屬高等女學校に於ける經驗と諸賢の示教とに基きて取捨選擇せり。

一、本書が果して實地教授上に多少の貢獻あるべきや否やは、これを使用せられたる諸賢の批評を待つの外なし、されど著者苦心の主なるものは左の諸點にありとす。

1、**要領の記述**　歐米諸國の盛衰、社會の變遷に關する事實の要領を記載し、世界の文化及び女子に關係ある事項に注意したること。

2、**各章の分量**　各章の分量は一時間の教授材料に止めんことに力め、比較的重要ならざるもの及び生徒の興味を喚起せんために載せたるものは間細字を以て記述せり。故にこれを削減せんことは教授者の任意たること。

3、**綱目の整頓**　教授の主眼點を定め、または生徒の記憶に便せんため、一章を數項に區分し、各項は更に數目に區分して上欄に記述することに力めたること。

4、**列國對照年表**　事實の前後を明にせんがため、列國對照年表を挿入し、また此の表

広島大学
教
80137
図書

によりて期間を直觀せしめんことを期せること。

5、**日本史及び東洋史との聯絡**　列國の對照年表には、日本史及び東洋史上の事實を摘記し、また上欄の年紀には、我が天皇または將軍の名及び年號と支那の時代とを竝記して、日本史及び東洋史との聯絡を圖れること。

6、**地圖・系圖・挿畫**　事實の理解に便せんため、簡明なる略地圖と系圖の大要とを處々に挿入し、また多くの圖畫を精選挿入して、生徒の知識を確實にし、其の興味を喚起せんことに力めたること。

7、**概括**　各期の終には年代・變遷・文化の大要を述べて、既得の知識を統合せんことに力めたること。

8、**地名・人名**　文部省の地名・人名取調委員の復命したるものによれること。

著者は本書に幾多の缺點あるを信じ、漸次其の改修に力めんと欲す。幸に諸賢の示教を得んことは著者の切望して已まざる所なり。

明治四十五年五月

著者誌す

女子 西洋史教科書　第四年制度用　目次

○第一編　上古

第一章　人文の發生　ペルシア及びギリシア諸國民の發達　一

第二章　ペルシアの侵入　ギリシアの文物　アレクサンドル大王の事業　八

第三章　ローマの初世及び中世　一四

第四章　キリスト教　ローマの末世　ローマの文化　二〇

○第二編　中古　上古の概括　二四

第一章　西ローマ帝國の滅亡　東ローマ帝國の盛衰　サラセンの興起　二七

第二章　フランク王國の盛衰　ロシアの建國　三二
イギリスの變遷
第三章　法王の權威　中古西ヨーロッパの情態　十字軍　三六
第四章　百年戰爭　オスマンリ・トルコの勃興　四二
文藝の復興
第五章　地理上の發見　四七
中古の概括　五一
○第三編　近古
第一章　宗教の改革　五五
第二章　十六世紀末の西歐諸國　五九
第三章　十七世紀に於ける歐洲諸國の情勢　六五
第四章　南洋及び東洋に於ける葡萄牙・西班牙・和蘭・英吉利　六九
第五章　ペテロ大帝　七四
第六章　フレデリキ大王　七八
第七章　殖民地に於ける英・佛人の衝突　八四
第八章　アメリカ合衆國の獨立　八七
第九章　十八世に紀於ける歐洲諸國の情勢　九〇
近古の概括　九五
○第四編　近世
第一章　フランス革命　九九
第二章　ナポレオン一世　上　一〇三
第三章　ナポレオン一世　下　一〇九
第四章　亞米利加諸國及び希臘の獨立　一一三
第五章　ナポレオン三世　一一七

第六章　イタリアの統一　一二二
第七章　ドイツの統一　一二六
第八章　アメリカ合衆國の發達及び南北戰役　一三三
第九章　ロシア・トルコ戰役　一三五
第十章　歐洲諸國の形勢　一三八
第十一章　アジアに於ける歐洲諸國の經營　一四二
第十二章　アフリカ及び太平洋に於ける歐米列國の經營　一四五
第十三章　最近文明の進步　一五二
近世の概括　一五六

女子

西洋史教科書　第四年制度用

富士德治郎著

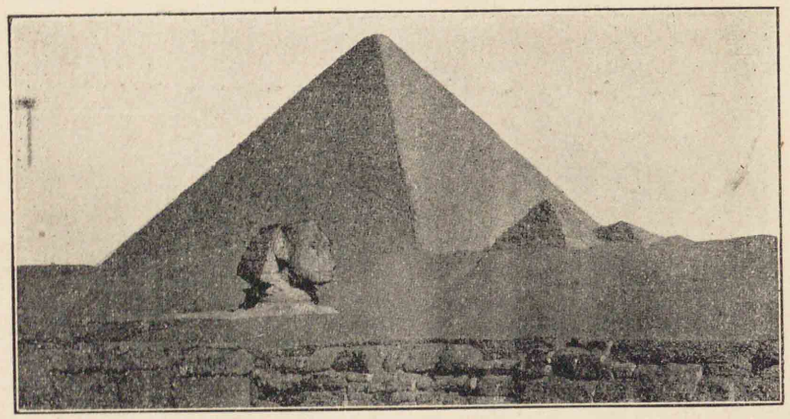
第一編　上古

第一章　人文の發生　ペルシア及びギリシア諸國民の發達

天惠

沿革

エジプト　エジプトは、ニール河の天惠により土地肥え住民の生活容易なりしかば、今より大凡五千年前、既に國を建て、西紀前一、五〇〇年頃は全盛を極めたり。



ピラミッド及び人面獅身の像

リバノン山頂の松（伊東工學博士所藏の寫眞による）

文化

バビロニアの興起（西紀前二、三〇〇年頃）

夫のミイラを抱きて哭するエジプト婦人中央にあるはエジプト人の使用せし象形文字なり

國人は建築に長じ、金字塔（ピラミッド）・人面獅身（スフィンクス）像など、雄大なる遺物多く、天文・數學・醫術なども稍、發達したり。

舊バビロニア　チグリス・エウフラト兩河の流域も、氣候溫和・地味肥沃なれば、人民夙に繁殖して、西紀前二、三〇〇年頃には、バビロニア王國起り、バビロンを首府とせり。國人は、天體を

古代エジプト人の耕作

文化

フェニキアの國情

音字の發明

ヘブライ人の一神教

獨立（西紀前一、五〇〇年頃）

崇め、星學に長じ、建築・彫刻も發達したり。

フェニキア　地中海の東岸に狹長なるフェニキアといふ小國ありき。其の山中には造船に適する良材多く、國人は、冒險の氣象に富みて、盛に貿易を營み、東はインド地方、西は太西洋にわたりて、當時の商權を握れり。其の發明せし音字は、漸次變化して、現今行はるる西洋文字となれり。

ヘブライ　フェニキアの南方にヘブライといふ民族ありき。篤く一神教（ユダヤ教）を奉し、西紀前一、一〇〇年頃は、盛なる王國なりしが、後、內訌生じ、兩國に分れたり。

アッシリアの興亡　アッシリアはチグリス河の上流にありて、元、バビロニアの殖民地なりしが、後、獨立し、遂に

西南アジア諸國の併呑

衰勢

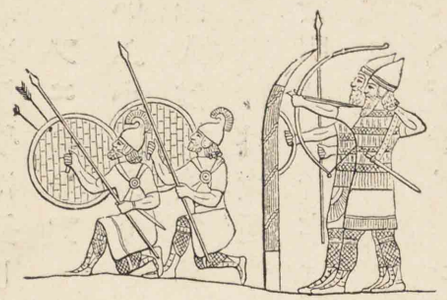
滅亡（西紀前六〇六年）

新バビロニアの隆盛

ペルシアの建國（西紀前五五〇年）（綏靖天皇頃）（孔子誕生の翌年）

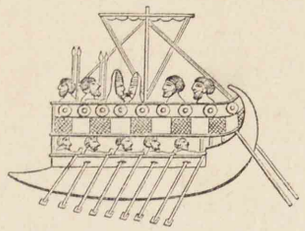
バビロニアを滅ぼしたり。國民勇武にして諸國を征略し、西紀前第七世期頃には一大王國を建てたり。然るに其の後國勢次第に衰へ、遂に其の屬國メヂアと、新バビロニアとの聯合軍のために亡ぼされたり。

四國の對立　アッシリア滅亡後は、メヂア・新バビロニア・エジプト及びリヂアの四王國對立せしが、中にも新バビロニアの勢力最も隆盛なりき。



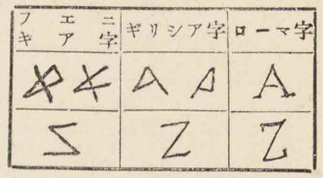
アッシリア人の戰鬪

ペルシアの興起　ペルシアは、もとメヂアの屬地なりしが、英主キロス立つに及び、メヂアを滅ぼし、ペル



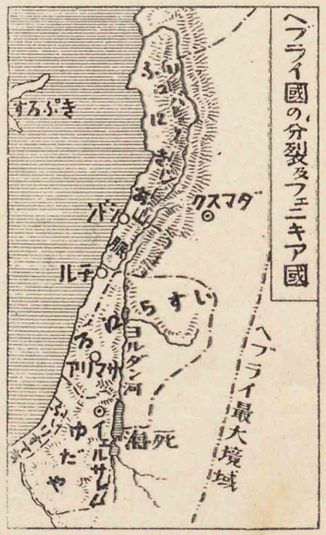
フェニキアの兵船

古代ユダヤの書卷



フェニキア字	ギリシア字	ローマ字
		A
		Z

西洋文字の變化



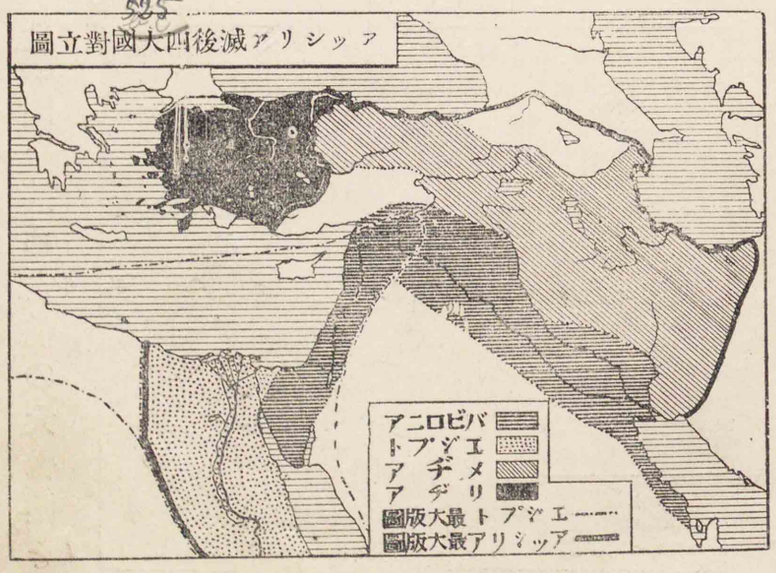
第一表

西紀前	日本	東洋	ヘブライ	フェニキア	バビロニア	エジプト
500	神代					
1000	神武天皇即位（660）	周武王殷を滅ぼす（1120）	イスラエル・ユダヤ分立（953）	チル市の隆盛（1100）	アッシリアに滅ぼさる（1250）	ペルシアに滅ぼさる（525）
1500						最盛期（1300）
2000						
2500						
3000					王國建設（2300）	家あり統一國（3000）
3500						
4000						

ダリオス
（西紀前五二一—四八五年）

キロス王の墓

シア帝國を建て尋いで、リヂア・バビロニアを伐ち從へぬ。其の後、國内一時亂れしが、王族ダリオス、これ



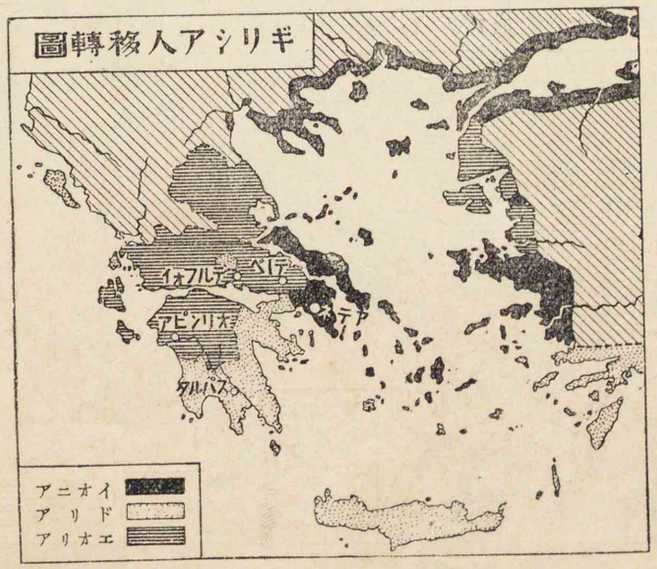
を平げて王位に登り、次第に版圖を擴め空前の大帝國を建てたり。

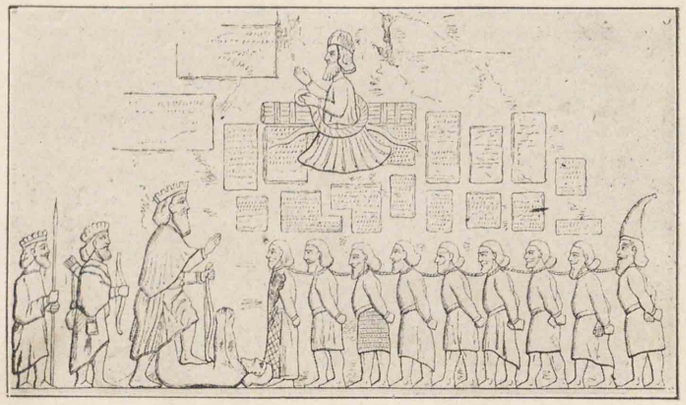
國土と住民

ギリシアの勃興　ギリシアは地中海の東部に突出せる半島にして、港灣に富めるにより、沿海の住民は、夙に通商に從事せり。

國民の團結

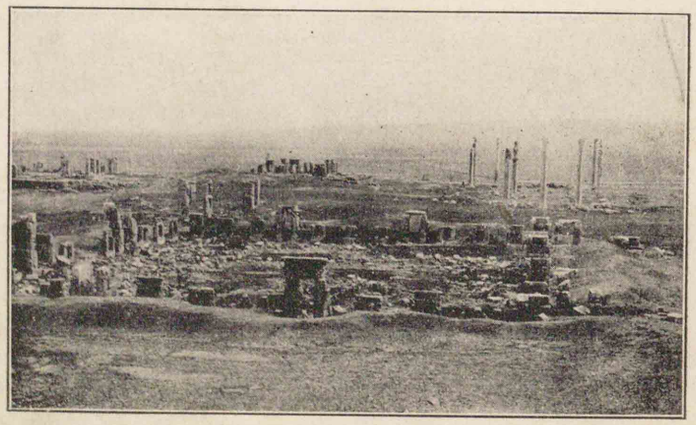
域内山多くして、數多の小國に分れたりしも、人種・言語・宗教等皆、同一なれば、外難に當りては協力する美風ありき。





ダリオスは捕虜を引見する圖（ベヒスタンの碑の圖）

ダリオスは意を内治に用ひ、國内を二十州に分ち、各州に知事を置きて民政を掌らしめ、また道路を開き、貨幣の制を定め、産業を保護せしかば、國運隆盛を極めたり。



ペルセポリスの遺趾

汝此の楯を携へて還るにあらずんばこれに載せられて歸れ

スパルタ

アテネ

ギリシアの諸邦中スパルタは、武勇を奬め體育を重んじたりしが、アテネはこれに反して自由と優美とを尚み、力を學術技藝に用ひ、相共に國力最も盛んなりき。

第二表

西紀前	アッシリア	ペルシア	ギリシア（スパルタ）	ギリシア（アテネ）	ローマ	東洋
500		(525)エジプト征服				
		(546)リヂア征服				
		(538)新バビロニア征服				
		(550)メヂア征服（パルシアの獨立）				
1000	(606)滅亡		(900頃)リコルゴスの國法	(594)ソロンの新法	(753頃)ローマ建設	(660)神武天皇即位
	(670)エジプト征服					
	(1250頃)バビロニア併呑					
1500	(1500)アッシリアの獨立					
2000						

第二章　ペルシアの侵入　ギリシアの文物

ペルシアとの交戰

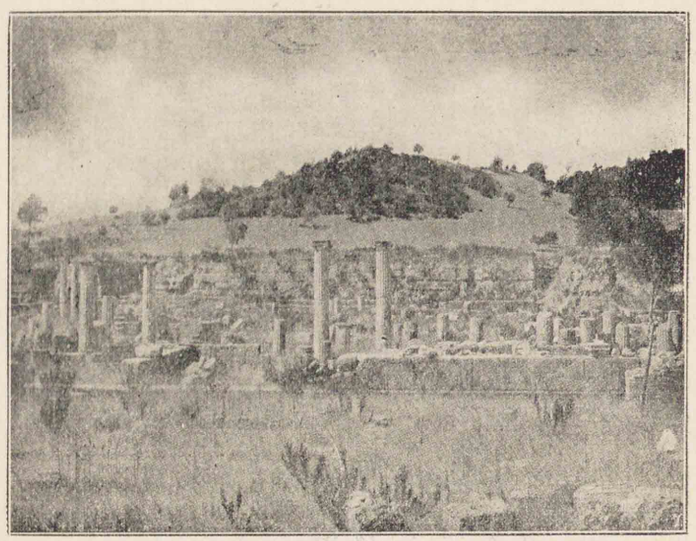
ペルシア戰役の原因

ペルシア戰役（西紀前四九二―四四九年）

アレクサンドル大王の事業

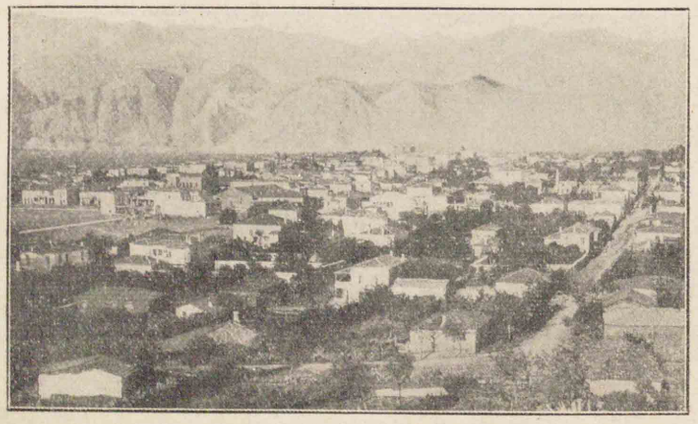
初めペルシアが、小アジア西岸なるギリシア殖民地を平定するや、自由を愛するギリシア人は、其の壓制を脫せんとて兵を擧げ、ギリシア本土の諸市も亦これを援けたり。

これよりペルシアは、大軍を發してギリシアに侵入せしが、サラミス灣の海戰にアテネの將テミストクレスはペルシアの艦隊を粉碎し次いで、ペルシアは其の陸軍さへ連敗せしかば、後、遂に屈して、ギリシア殖民地の獨立を承認せり。

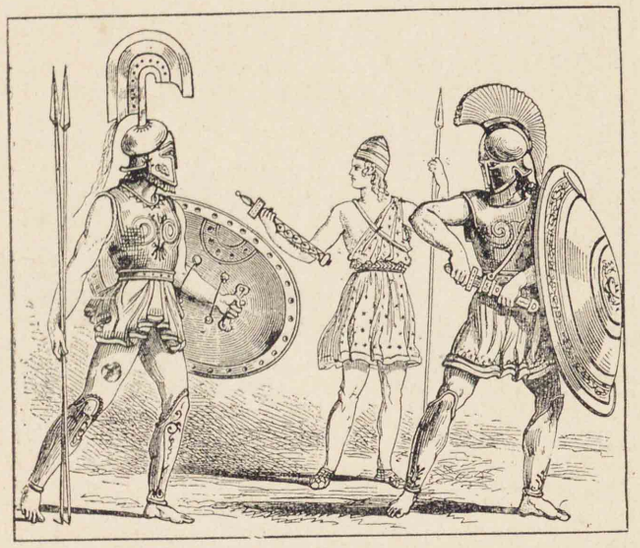


オリンピアの遺趾

オリンピアにはギリシア人の最も崇敬せるゼウスの社あり、其の大祭は四年毎に行はれ、各地の選手集りて文武の技藝を競ひ、其の優勝者たることを無上の光榮となせり。



スパルタの現狀



ギリシアの戰士

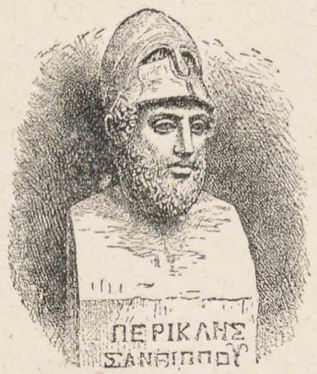
ギリシアの貴婦人及び侍女

ペリクレスの世（西紀前四四四―四二九年）（我が孝昭天皇の世）

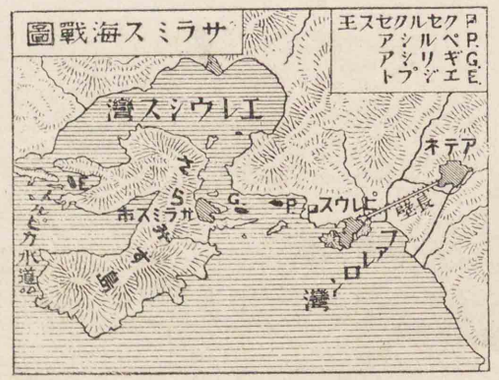
美術
建築
彫刻

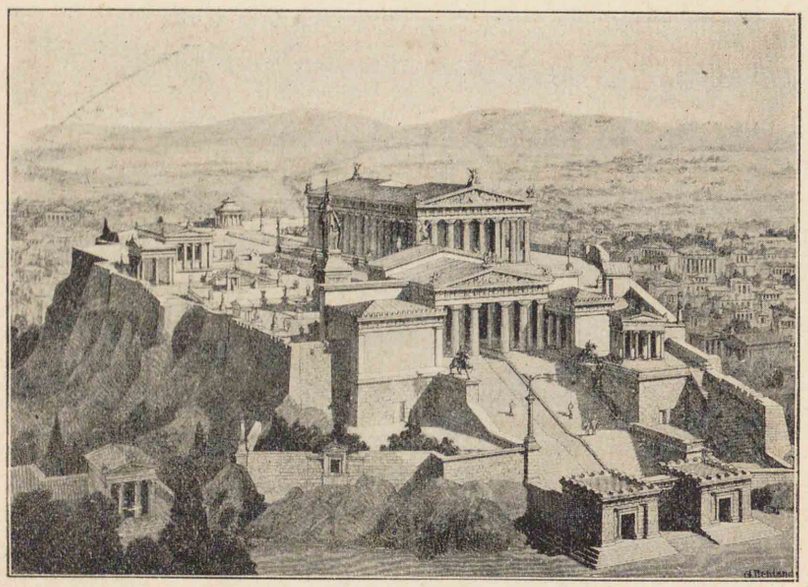
戰後、アテネの勢威大いに揚り、才德ある大政治家ペリクレスは、衆望を負ひて政を執り、アテネの富强を圖り、學藝を奬勵せしかば、文物燦然として輝くに至れり。これをペリクレス時代といふ。

ギリシアの文化　西洋文明の淵源はギリシアに發し、ギリシア文物の精華はペリクレス時代に現はれぬ。當時の建築に係れるパルテノン神殿（イクチノスの作）は莊嚴を極め、フイヂアスの彫刻は高雅にして

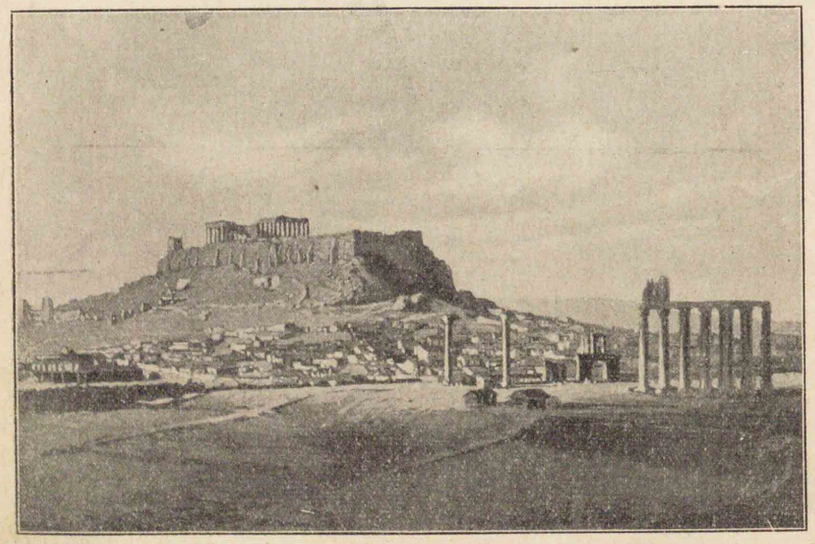


ペリクレスの像





アテネのアクロポリス（ルーレンテルル氏の設計圖）



アテネのパルテノン（現時）

哲學

ソクラテス

プラトン

アリストテレス

精妙、共に千古の模範たり。諸種の學術も盛にして、大家多く出でたり。中にも、大聖ソクラテスは、有名なる哲學者にして、知德合一の說を唱へ、人道の皷吹につとめたり。其の高弟プラトンは深遠なる說を述べ、プラトンの高弟にしてアレクサンドル大王の師たるアリストテ

ソクラテスの像

アテネ少年行列（パルテノン堂上の彫刻）

フィリポの政策

アレクサンドル大王の東征（西紀前三三四年）（我が孝安天皇の朝）（支那の戰國時代）

レスは博學にして皆、名あり。

マケドニアの興起　其の後ギリシアの諸邦相爭ひ、國力相次いで疲弊せり。此の時に當り、ギリシアの北方なるマケドニアには、國王フィリポあり。大いに國勢の振興を圖り、巧みにギリシアの内事に干渉し、遂に、アテネ其の他の連合軍を破りて、威をギリシア全國に振ひぬ。

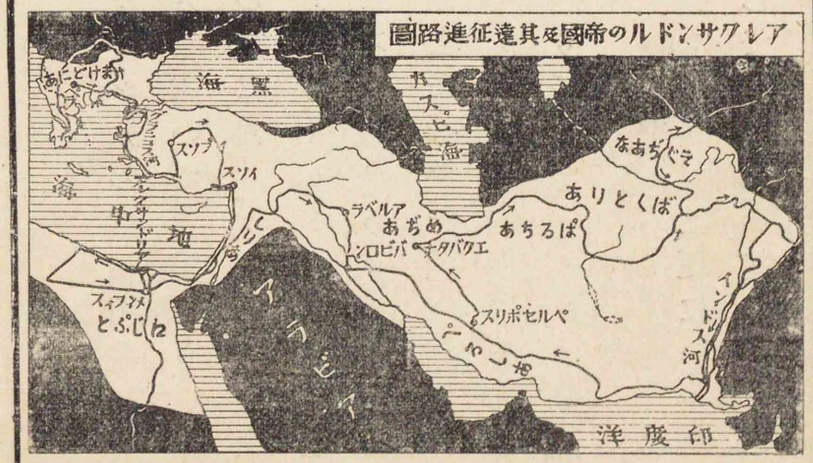
アレクサンドル大王の像

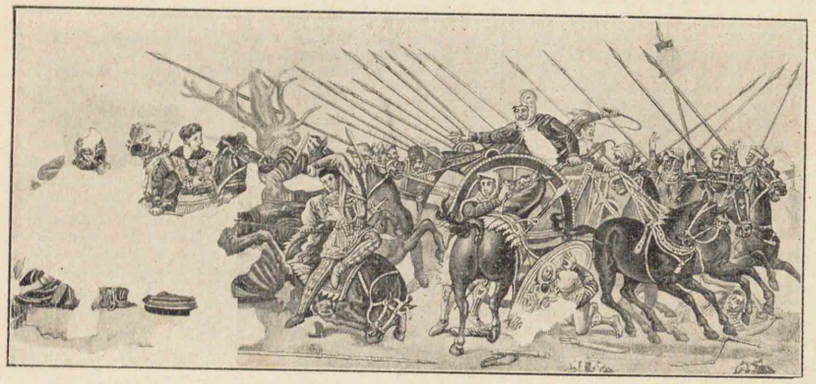
アレクサンドル大王の偉業　フィリポは更にペルシア遠征を企てしが、未だ果さずして歿しぬ。其の子アレ

アレクサンドル大王の凱旋（西紀前三二四年）東西文化の融合

クサンドル大王は稀世の英傑なり。父王の志をつぎ、西紀前三三四年自ら大軍を率ゐてペルシア遠征の途に上れり。大王は行く行く各地を討ち従へ、遂にダリオス三世の大軍を破りて、ペルシアの全土を定め、更にインドに攻め入りしが、將士遠征に厭きしを以て、遂にバビロンに凱旋せり。

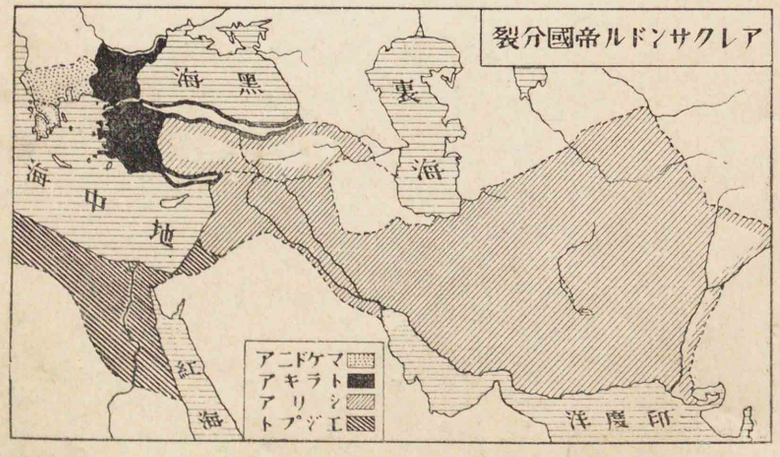
大王は東西兩洋の文化を融和して、一大帝國を建設せんと欲





イソスの戰

一八三一年イタリアのポンペイ廢墟より掘出し現に
ナポリ國立博物館に藏せる寄木細工の圖によ
る
（中央はダリオス左はアレクサンドル）
上馬は王スオリダは戰車に乘りアレクサンドル大王は
損毀はるゆ見く白部下の王大りせ闘奮てひ振を槍に
せる部分なり



大王の病死（西紀前三二三年）

し、親らペルシアの王女と婚し、將士をしてペルシアの婦人を娶らしめ、ペルシアの風習を重んじ、また努めてギリシアの文化を東方に移さんと圖れり。されど不幸にして、大王は其の業未だ完からざるに病歿し、其の後諸將相

第三表

西紀前		東洋
300	(323) 大王の病死 (334) アレクサンドル大王東征 (338) ケーロネアの戰	(334) 蘇秦六國の相となる
350	(371) レウクトラの戰	
400	(404) アテネア降落	
	(444-429) ペリクレス時代	
450		(479) 孔子卒す
	(480) 第三回ペルシア戰役 (490) 第二回ペルシア戰役 (492) 第一回ペルシア戰役	
500	ギリシア及マケドニア	

ローマの建國（西紀前七五三年）

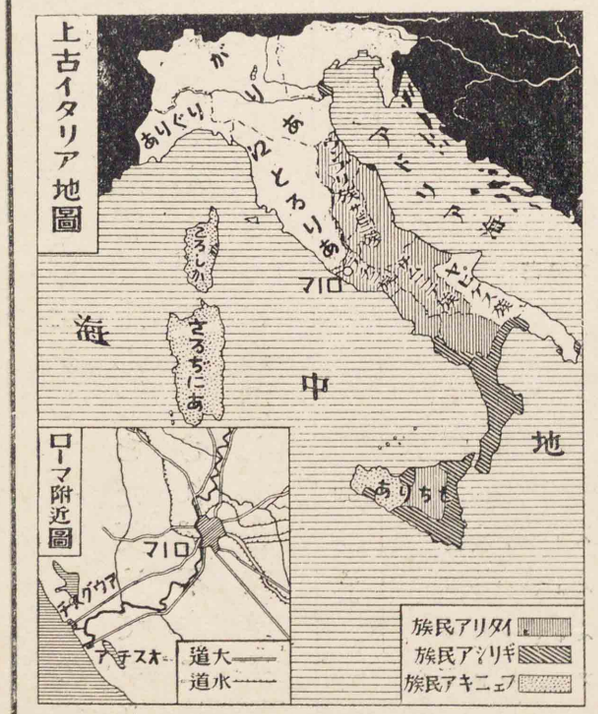
共和制の創立（西紀前五〇九年）

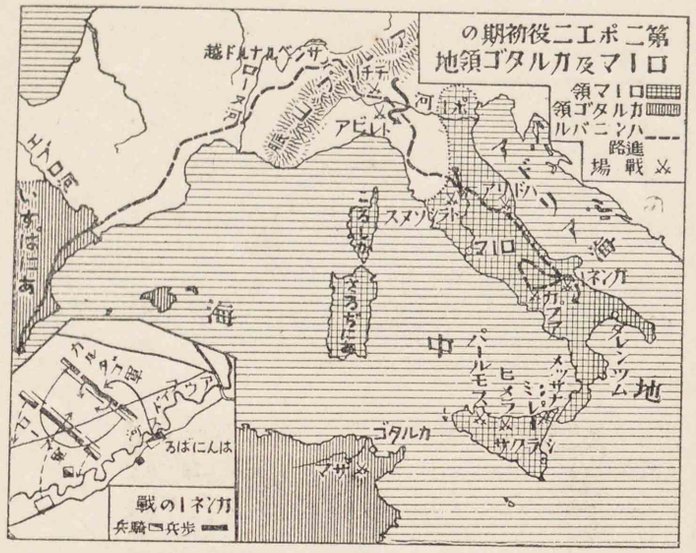
爭ひ、大王の版圖忽ち分裂したり。

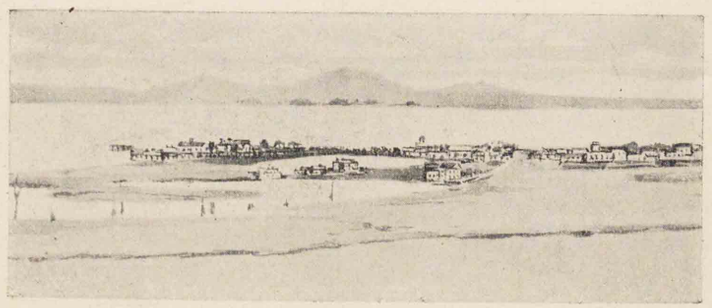
第三章　ローマの初世及び中世

ローマの興起

ローマは、ラチニ族が、中部イタリアなるチベル河畔の要地に建てたる一村落より起れり。其の初めは王政なりしが、後に共和制と







カルタゴの遺跡

貴族平民の親和

なれり。然るに貴族久しく政權を專らにせしかば、軍役・重稅に苦むのみなりし平民は、參政權を求めて多年抗爭し、次第に權利を得て、西紀前三〇〇年頃には、全く同等の地位を占むるに至れり。これより上下一致して外敵に當りたれば、國勢年と共に隆盛に赴き。

ローマの兵士

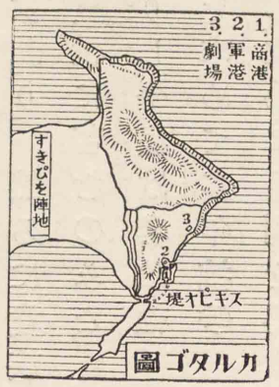
イタリア半島の平定（西紀前二七一年）（我が孝靈天皇の朝）

ポエニ戰役（西紀前二六四―一四六年）

マケドニア滅亡

西紀前二七〇年頃には、殆どイタリア半島を平定するに至りぬ。

當時アフリカの北岸にカルタゴあり。もとローマ人がポエニと呼びしフェニキアの殖民地なりしが、地中海の商權を握り、富强を極めたり。ローマは遂にこれと衝突し、三回の大戰爭を開きて、これを滅ぼし、イスパニアをも併せたり。



これより先、ローマは東方の經略を始め、シリアを討ちて、小アジアを割かしめ、カルタゴ滅亡の年を以て、マケドニア・ギリシアを征服せしかば、地中海沿岸の諸國は、概

ケーザルの像

アウグスツスの像
ローマバチカノ博物館所藏の大理石像による

寳にケーザルはローマリウスス以上なり（スエトニウス）

ローマ共和政の盛時

貧富兩黨の爭抗

ケーザル

オクタウィアヌスの天下一統（西紀前三一年）

ねローマの版圖に入り、ローマは大に富强となりぬ。

共和政の末路　ローマの富榮に赴くや、國民は漸く奢侈遊惰に流れ、强健質朴の古風は全くすたれぬ。また富豪は土地を兼併し、小民は業を失ひて益貧苦に陷り、遂に貧・富各黨を立てて相爭ひ、互に武力を用ひて殺傷するに至れり。

かくてローマは一時貧民黨の首領ケーザルの有に歸せり。ケーザル容姿清瘦なれども精力絶倫にして、鋭意弊政を改め、治績頗る擧りしが、其の威名を嫉み、共和政治を喜ぶもの、陰に相謀りて、之を元老院に刺殺せり。

ここに於てケーザルの養嗣オクタウィアヌスは其の黨と共に立ちて反對黨を仆し後、遂に天下を一統せり。

ローマ帝政の隆盛

オクタウィアヌスのローマの全權を握るや、アウグスツス（威嚴高大の義）の尊號を受けぬ。されば、ローマは共和政體の外形を存せしも、帝政の實あるに至れり。

帝政の實成る

當時ローマの版圖、東はエウフラト河邊より、西は太西洋に至り、北はライン・ドナウ兩河及び黑

アウグスツス時代のローマ版圖

ローマの水道の遺趾

海より、南はアフリカに及べり。

アウグスツスは、意を國防民治に用ひて、風俗を矯め、建築を起し、また文藝を奬勵せしかば、文物隆盛を極め、ローマ市は莊麗なる大都となり、かの所謂黃金時代を見るに至れり。

アウグスツスの内治

第四表

西紀前	ローマ	東洋
100	(146) カルタゴ滅亡 マケドニア征服	(133) 我が開化天皇の朝 漢の武帝匈奴攻擊
200	(218) 第二回ポエニ役 (264) 第一回ポエニ役 (272) タレンツム陷落	(221) 我が孝靈天皇の朝 秦の天下一統
300	(300頃) 貴族平民權力の平等	
400	(390) ガリの入寇	
500	(509) 共和政體創立	(479) 孔子歿す
600		

第四章　キリスト教　ローマの末世

ローマの文化

イエス生る（西紀前四年）（我が垂仁天皇の朝）（前漢の哀帝の朝）

キリスト教の開基

キリスト教ローマ市に入る

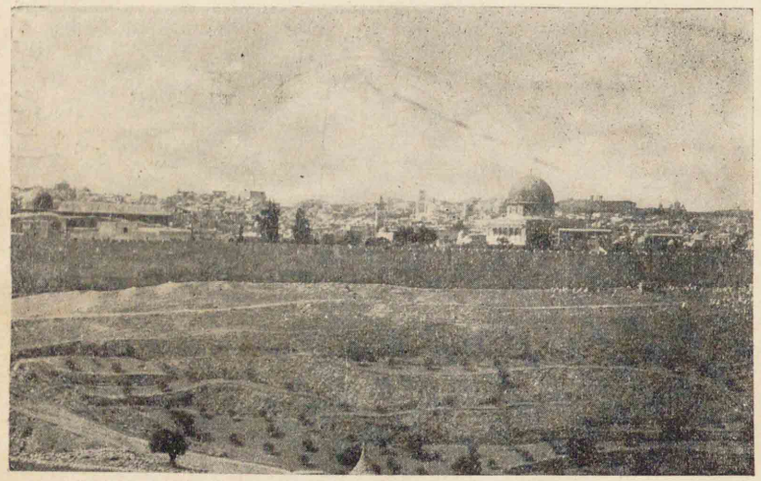
キリスト教の西流　アウグスツスの治世中、ユダヤのベテレヘムに、イエスといふもの生れたり。長じて、自ら神の子なりと稱し、ユダヤ教を改革して、新に博愛主義の一神教を創めたり。キリスト教卽ち是なり。イエスは、不幸にしてユダヤ人に忌まれ、磔殺の禍に遭ひしが、其の弟子は四方に散じて、熱心に其の教を弘め、西紀一世紀の中頃には、遂にローマ市に傳へたり。

ローマ歷代の皇帝は國安を亂すものなりとして、大いに其の信徒を迫害せしも、教徒の信仰愈固く、其の教は益諸

ローマの國教となる（西紀三一三年頃）（仁德天皇の御卽位）

ローマの衰運

外寇に苦む



イエルサレムを東郊より望む

州に傳播せり。コンスタンチヌスの、教徒の助力を得て帝位に卽くに及び、遂に自ら此の教に歸依し、また立てて國教となせり。これより、キリスト教は容易に各地に傳播するに至れり。

帝政の末路　ローマは、西紀第二世紀の末頃より、漸く衰運に傾きぬ。歷代の皇帝概ね暗弱にして、將士專横を極め、恣に帝王を廢立し、約百

コンスタンチヌス（西紀三二三年—三三七年）

コンスタンチノプル奠都（西紀三三〇年）

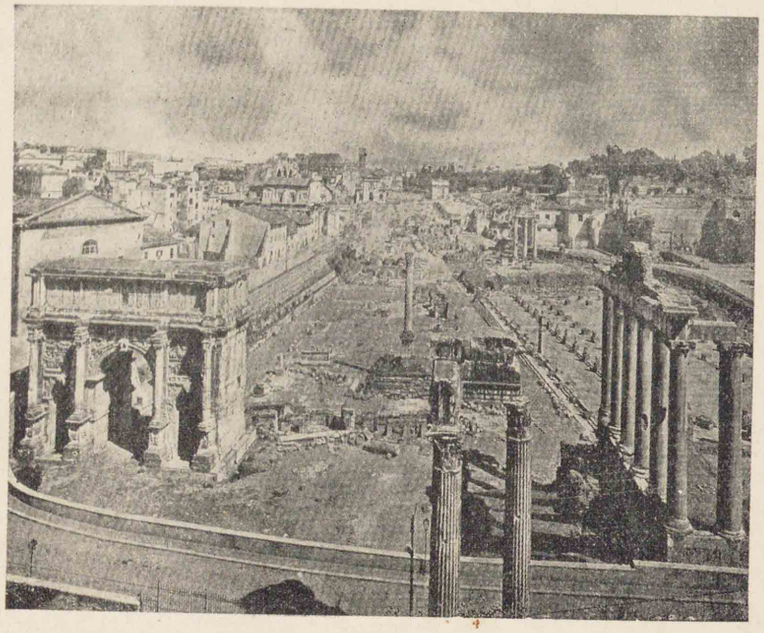
ローマ帝國東西に分る（西紀三九五年）（仁德天皇の朝）（東晉の孝武帝の世）

年間に二十五人をかへたり。加ふるに、東方には、ササンルマニ族漸く強盛となりて境上に侵入し來れり。

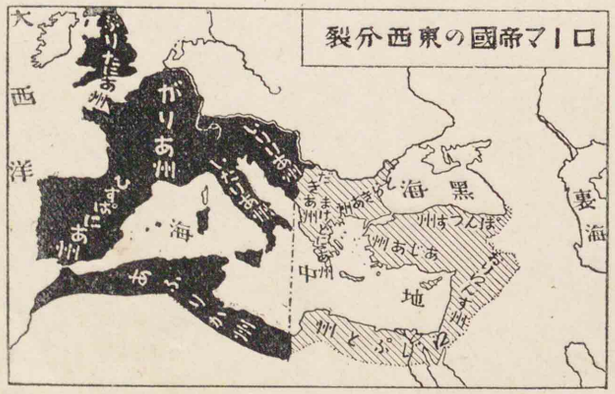
コンスタンチヌス大帝の像
（ベルリン博物館藏金牌の一面）

コンスタンチヌス帝に至り、都を今のコンスタンチノプルに遷して、制度を整へ、國威稍振へり。然るに、帝の歿後國內また亂れ、國威大いに衰へたり。テオドシウス帝立つに及び、深く內外の形勢を察し、帝國を東西に分ちて、二子に與へぬ。これよりローマ帝國は長く二分せり。

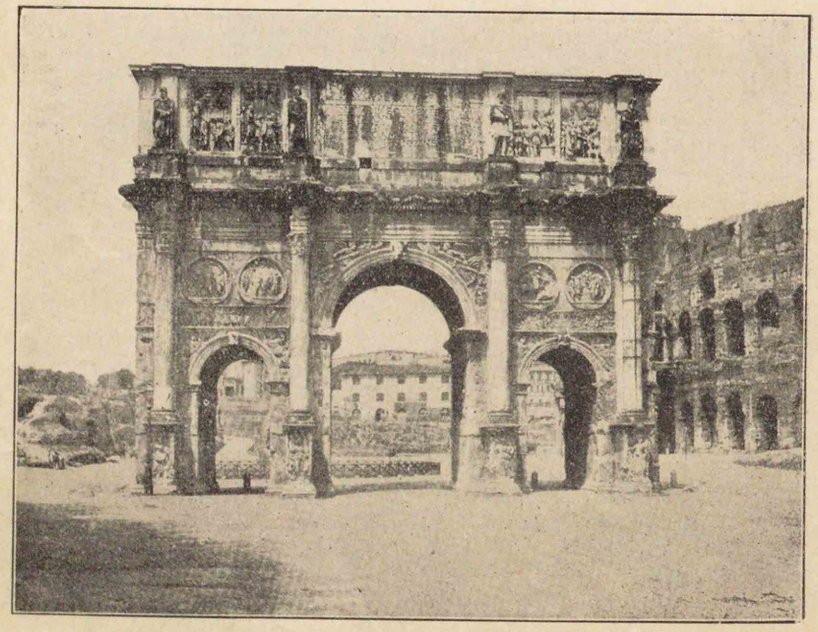
ローマの文化　ローマ人は剛健の氣象と、熱烈なる愛



ローマの演說所の現狀



ローマの大劇場（チツス帝の時完成したるものにして高さ二百尺
觀客八萬五千人を容るべし）



コンスタンチヌス大帝凱旋門（紀元三一二年の建築）

國心とを有し、前古無比の大帝國を建てたり。

教育・法律

教育は實際的にして、修辭・辯論を尚び、法律は大いに發達して近世の模範となれり。

祖先の崇敬

またローマ人は祖先を尊び、其の祭祀を絶たざらんことを努め、家ごとに其の肖像を飾れり。

文藝・美術

文藝美術は、主としてギリシアに倣ひたれども、アウグスツス時代には文運隆盛の極に達し、著名の文人・學者輩出せり。建築も、亦、國力の盛なると共に漸次莊麗を加へ、宮殿・劇場・凱旋門等の大工事を興し、盛に穹洞形を利用したり。かくてローマは、ギリシア及び古代諸國の文化を吸收して、これを其の領土内に普及し、近代の歐洲諸國に傳へたり。

第五表

年代	ローマ	ゲルマニ	東洋及日本
400	(395)ローマ帝國の東西分立	(375)西ゴートの遷徙	(399)仁德帝崩 (354)桓溫の北伐
300	(330)コンスタンチノプル奠都		
200			(200)神功皇后新羅征伐
100			(65)佛教支那に入る
四紀1	(4)キリスト生る (31)オクタウィアヌス天下一統 (44)ケーザル遭害 (6)第一三頭政治		(西紀前2)殉死の禁
100 西紀前			

上古の概括

太古より約西紀四世紀に至り、ローマの東西に分立せしは皇紀一、〇五五年にして、仁德天皇の御代の末、支那東晉の末頃に當れり。

變遷 天惠あるニール河畔と、チグリス・エウフラト流域は、西洋人文の發生地なり。ハム・セム兩民族は、エジプト及び西部アジアに繁殖し、エジプト・バビロニア・フェニキア・ヘブライ・アッシリア等の國を建てぬ。アーリア民族のペルシア起るに及び、此等の地方を統一して一大帝國を開けり。ギリシア諸國の發達するに從ひ、遂にこれと衝突せしが、アレクサンドル大王出づるに及び、東西の文化漸く融合せり。ローマ人は、此等諸國民に後れて、競爭場裡に現はれしが、巧妙なる政治と、卓絶せる武力とによりて、次第に各地を征服し、遂に地中海を包容する大帝

國を建て、政治及び宗教上に統一を遂げたるのみならず、ギリシア其の他の文化を吸收して、ラテン文明を發揮したり。

文化　エジプト人・バビロニア人は、共に天文曆數に通じ、建築・彫刻にも秀で、フェニキア人は、貿易・殖民の率先者にして、アルファベットの發明者たり。ヘブライ人は、深く一神教を信じ、ユダヤ・キリスト兩教を發生せしめ、スパルタは尙武教育の典型を示し、アテネは文學・美術の淵源たり。ローマに至りて、諸種の文化は統合せられたるが、中にも其の一大特色と謂ふべきは、法律の發達なり。

第二編　中古

第一章　西ローマ帝國の滅亡　東ローマ帝國の盛衰　サラセンの興起

ゲルマニの占居地

ゲルマニの氣風

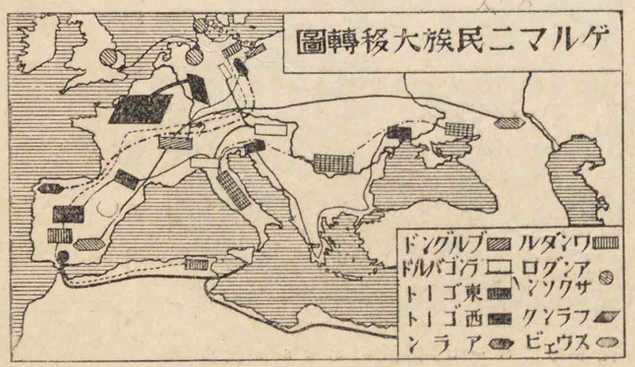
ゲルマニ人の遷移　當時歐洲の中部及び西北部にはゲルマニ民族蕃殖せり。此の民族は、十數種の部族に分れ、何れも勇武にして戰を好み、農・牧を事とし、婦人を重んじ、獨立自由を尙び、風俗概ね

古代ゲルマニの風俗（ローマにある紀念碑の浮彫）

ゲルマニの侵入

清閑純朴なりき。ゲルマニ民族は、ケルト民族を其の西部に退け、ローマの衰ふるに乘じて、漸く邊境に出沒し、またモンゴル種のフン族に追はれて次第にローマの領内に侵入せり。

ゲルマニ騎兵とローマ歩兵との戰
（マルクスアウレリウス帝のローマに建てたる紀念圓柱の浮彫）



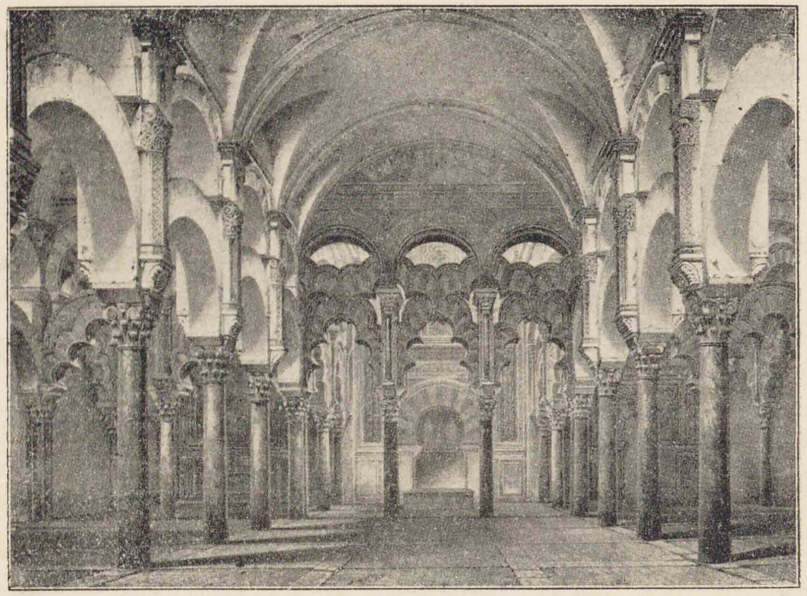
西ローマ帝國の滅亡（西紀四七六年）（雄略天皇の朝）（魏宋對立の世）

ユスチニアヌス帝の卽位（繼體天皇の朝）（梁の武帝の世）

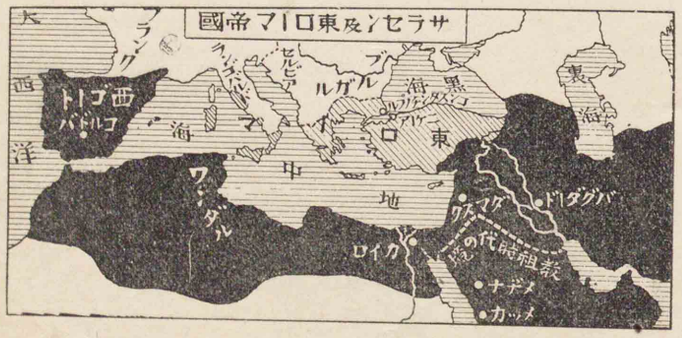
西ローマ帝國の滅亡 かくて、西ローマ帝國は、國運日に傾き、政治の實權は、ゲルマニ傭兵の手に握られぬ。四七六年に至り、其の長オドワケルは、遂に帝を廢して自らイタリアを支配せり。西ローマ帝國是に於て亡びぬ。

東ローマ帝國の盛衰 東ローマ帝國は、分立以來、常に內憂・外患に苦みしが、ユスチニアヌス帝位に卽くに及び、

ユスチニアヌス帝と從者
（ラウエンナに於ける當時の寄木細工による）



コルドバの禮拜堂内部（アラビア式建築）（伊東工學博士所藏）



サラセン人ムハメッド（西紀五七一年―六三二年）（欽明天皇以後）（南北朝末より隋唐頃）

イスラム教創始

外國の侵略

國威頓に揚れり。帝鋭意治を圖り、ローマ法典を編成せしめ、また支那より養蠶の法を傳へぬ。されど、帝の歿後、國勢また衰へたり。

サラセンの興起　サラセンは、アラビアの住民にして、遊牧・隊商に從事し、第七世紀の初、ムハメッド出づるに及び、世界に雄飛するに至れり。ムハメッドはメッカに生れ、自ら天使なりと稱し、ユダヤ・キリスト兩教を參酌して、イスラム教（回教）を開き、兵力を以て其の教を弘め、アラビア全土を服して、サラセン帝國を建てたり。ムハメッドの歿後、歴代の法嗣（カリファ）は、教祖の遺志を奉じ、政教の兩權を握り、四方を侵略せり。教徒は皆、殉教を榮として、奮戰せしかば其の軍の向ふ處敵なく、東はペルシアを征して、

東西兩ハリファの分立（西紀七五五年）（孝謙天皇の朝）（安祿山反す）サラセンの盛時

唐の西境に迫り、西はエジプトより、アフリカの北岸を平定し、更にイスパニアに渡りて、これを征定せり。

サラセン帝國は、かく廣大の版圖を有し國勢盛なりしが、間もなく、法嗣繼承の爭生じて、東・西の兩國に分れ、東はバグダードに都し、西はイスパニアのコルドバを首府とせり。

ムハメッドの像

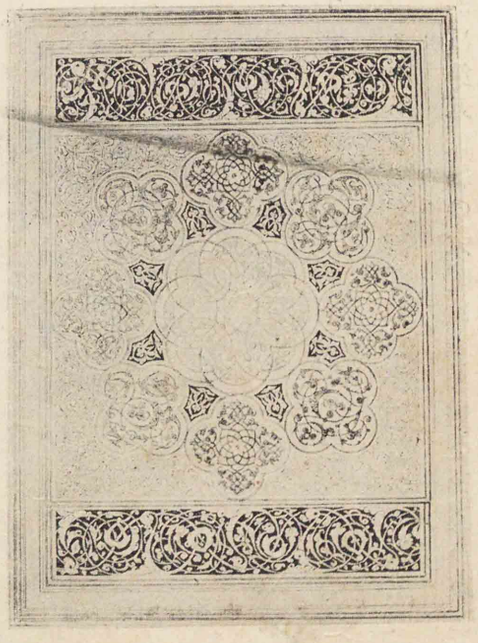
サラセンの文化　サラセンの東西兩帝國は、相競ひて、產業の奬勵、學藝の發達を計りしかば、第八世紀の末頃は、最も繁榮を極め、東西文明の

學藝

傳播者となり、一時西歐文化の中心となれり。特に天文・數學・理化學等の發達に資する所多く、其の建築は一種の趣を備へ、紋樣は大に發達したり。

第二章

フランク王國　フランク王國の盛衰　ロシアの建國　イギリスの變遷　西ローマの滅亡後ゲルマニの一派フ



サラセン模樣（コーランの表紙）
（伊東工學博士所藏の圖による）

フランク王國の建設（西紀四八六年）（顯宗天皇の朝）

ランク族の酋長フロドウイヒは、ガリア地方を統一して、フランク王國を建てしが、其の子孫庸劣にして、實權は漸次宮相の手に移れり。宮相カロロ・マルテルがサラセンを擊退せしより、其の威權愈〻強く、其の子ピピンに至り、遂に王を廢して自立し、カロリンガ朝を開けり。

カロリンガ朝（西紀七五一—九八七年）

カロリンガ朝略系圖

ピピン—カロロ・マルテル—ピピン—カロロ大帝—ルイス—ロタール（ライン流域とイタリア）
　　—ルイス（東部フランク）
　　—カロロ（西部フランク）

カロロ大帝（西紀七六八—八一四年）

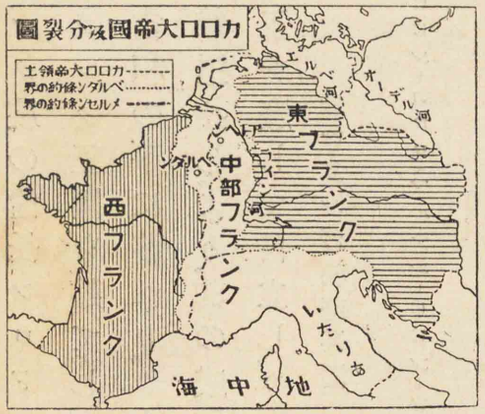
ピピンの子カロロ雄略あり。四方を征服して、ゲルマン人を統一し、遂にローマ法王より帝冠を受けて、西ローマ皇帝と稱したり。

西ローマ皇帝の稱號（西紀八〇〇年）

帝、都をアーヘンに奠め、大いに制度を整へ、農・工を保護し、

學藝を奬勵せしかば、富强日に加はり、ローマの文化はゲルマニの氣風と融合するに至れり。帝の歿後其の嗣子統御の才なく、諸孫領土を爭ひて、紛亂せしが、八四三年のベルダン協約によりて、帝國は遂に三分するに至れり。後のフランス・ドイツ・イタリアはこれより起れり。

ベルダン協約（西紀八四三年）（仁明天皇の朝）（唐の武宗の世）



カロロ大帝の像
（パリ・カルナバレ博物館所藏の小銅像による）

ドイツ王選擧の制起る（西紀九一一年）

オット一世（西紀九三六—九七三年）

ドイツ王、神聖ローマ皇帝となる（西紀九六二年）（村上天皇の朝）（宋の太祖の世）

ロシアの起源（西紀八六二年）（清和天皇の朝）（唐の懿宗の世）

ドイツにては、カロリンガ王統絶えてより、國王選擧の制起りぬ。英邁なるオット一世立つに及び、内政を整へ、外寇を平げ、遂にイタリアを定め、九六二年ローマ法皇の加冠によりて、神聖ローマ皇帝と稱したり。

オットー大帝
（ドイツ・マグデブルグ市伽藍内の木像による）

ロシアの建國　歐洲の東部には早くよりスラブ民族蕃殖せり。然るに其の後ノルマンの一派ルス族は、ロシアを侵略し、九世紀の中頃に至り、其の酋長ルーリクはノブゴロドを建設したり、これ今のロシア帝國の起源なり。

イギリス　これより先、第五世紀の頃ゲルマニの一族

エグベルト大王の一統（西紀八二七年）

大憲章の發布（西紀一二一五年）

イギリス議會の始（西紀一二一六年）

アングロ・サクソンはイングランドに渡り、其の住民を征服して許多の王國を建てしが第九世紀の初、エグベルトこれを一統して英國の基を開きぬ。其の後第十三世紀の初、ジョアン王立つに及び、外はフランスに於ける領土を失ひ、内は政綱も甚だ亂れしかば、貴族・僧侶等王に迫りて大憲章を發布せしめたり。これ實にイギリス憲法の基礎なり。其の子ヘンリ三世の時、貴族僧侶及び市民の代表者より成れる議會初て開かれ、立憲制漸く確立せり。

第三章　法王の權威　中古西ヨーロッパの情態　十字軍

ローマ法王

キリスト教の盛なるに隨ひ、僧侶の勢力

第六表

西紀	イギリス	西ローマ	東ローマ	サラセン	東洋	日本
400						
500		(486)王國建立 フランク (476) 西ローマ帝國滅亡 (453) フン酋長アッチラ死す	(492) 東ゴート王國立 其他	(527) ユスチニアヌス帝卽位		
600	(449) ソロアン建國 ングロ			(628) ペルシアと和す	(589) 隋文帝の天下一統 (439) 魏の北一統	(457) 雄略帝卽位
700				(726) 偶像禁止令	(755) 安祿山の反	(607) 小野妹子隋に使す
800		(800) カロロ大帝西ローマ皇帝と稱す		(711) 西ゴート國王ロデリック死す (632) ムハメッド死す (622) ヘジラ	(755) サラセン帝國分立 (571) ムハメッド生る	(794) 桓武帝遷都
900		フランス　イタリア　ドイツ (843)ベルダン協約	(862) ロシアの起源			

は次第に増大せしが、ローマなる教會の大僧正には、人材相つぎて出で、最も世人の尊敬を受け、遂に法王として仰がるるに至れり。

法王の威權　西ローマ帝國を滅ぼしたる北方の蠻族は、夙にキリスト教に歸依せしかば、ローマ法王の威權愈〻盛なり。第八世紀の初、東ローマ皇帝の偶像禁止令に反對して、皇帝と絶ち、反てフランクと相親めり。其の王ピピンは、ローマ法王より王號を許されしを喜び、イタリア北部の地を法王に寄附せしにより、法王はこゝに始めて領土を得、遂に政治上にも其の權勢を振ふ

偶像禁止令に反對す（西紀七二六年）

法王領の起源

グレゴリオ七世の像

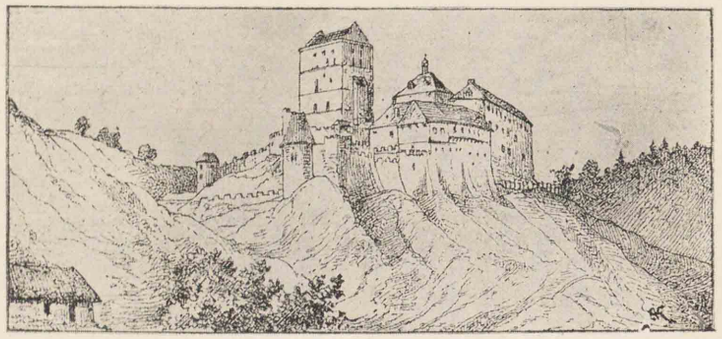
グレゴリオ七世（西紀一〇七三年―一〇八五年）

ヘンリ四世（西紀一〇五六年―一一〇六年）

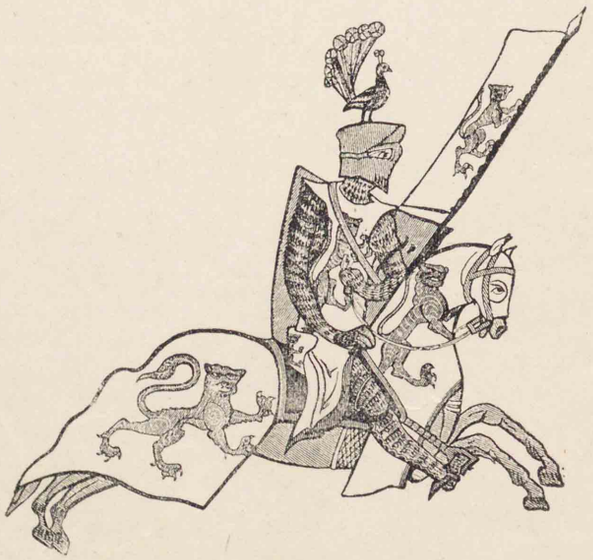
ヘンリ四世法王に謝す（西紀一〇七七年）

に至りぬ。法王グレゴリオ七世雄略あり。先づ教會内部の弊風を去り、次いで帝王の僧官任命權を奪はんとせしかば、ドイツ王ヘンリ四世大いに怒り、法王を廢せしが、法王も、また王を破門し、ドイツの諸侯をして、王に背かしめたり。王已むを得ず、一〇七七年親ら法王を訪うて罪を謝し、僅に赦さるゝを得たり。其の後、また賢明の法王出で其の威權は宗教・政治の兩界に振ひ一時は諸國の君主、皆其の命を仰ぐに至れり。

西歐の封建制度　西ローマ帝國の滅亡より、第十四世紀頃まで、封建制度は普く西歐諸國に行はれき。初、ゲルマニ諸族の邦國起るや、一時社會の秩序は亂れ、強者と弱者は相賴り相衞りて、自ら強くせんとする風起りぬ。カ



中古の城廓



騎士の武裝（十字軍時代）
（ジェノバ年報所載の圖）

封建制度の起因

ロロ・マルテルが、フランクの宮相となるや、領土を割きて、部下を封じ、平素武技を練習し、戰時は王に從ひて、忠勇を盡さしめたり。是を封建制度の起因とす。其の後封土世襲の風行はれ、諸侯僧侶等、苟も封土を有するものは更に之を部下に割與して、君臣・主從の關係を結び、第十世紀頃には封建制度完成したり。

封建制度の發達

騎士の美風

騎士たるものは、神を敬し、婦人を尊び、義勇を重んじ常に武藝を修め士道を守ることに勉めたり。

セルジウク・トルコの興起

十字軍 初、トルコ人の一派セルジウク族は、カスピ海の附近に住して、イスラム教を奉ぜしが、サラセン人の衰勢に乘じて、次第に西南アジアを侵略し、遂にコンスタンチノプルに迫れり。

東ローマ帝國の危機

東ローマ皇帝これを怖れ、援を法王

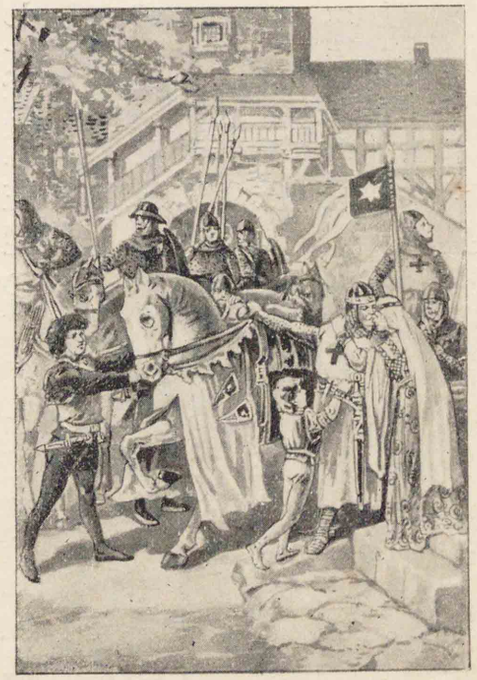
キリスト教徒の迫害

クレルモンの會

西歐の人情

第一十字軍（西紀一〇九

に請へり。時にイエルサレムの舊蹟に巡禮するキリスト教徒も甚しき虐待を蒙れり。一〇九五年、法王ウルバノ二世は遂に教徒の大集會をクレルモンに開き、熱心に聖地回復の急を說けり。敬神の念篤く、尙武の氣盛なる西歐の君臣は、之を聞きて感激し、皆、十字の徽章を著け、爭つて遠征の途に上れり。一〇九六年に出發せる第一十字軍は苦戰の後、イエルサ



一諸侯の十字軍に出發せんとする圖

六年—一〇九九年）

イエルサレム王國（西紀一〇九九年—一一八七年）

第二十字軍（西紀一一四七—一一四九年）

十字軍の終局（西紀一一二九—一一年）（伏見天皇の朝）（元の世祖の世）

十字軍進路圖

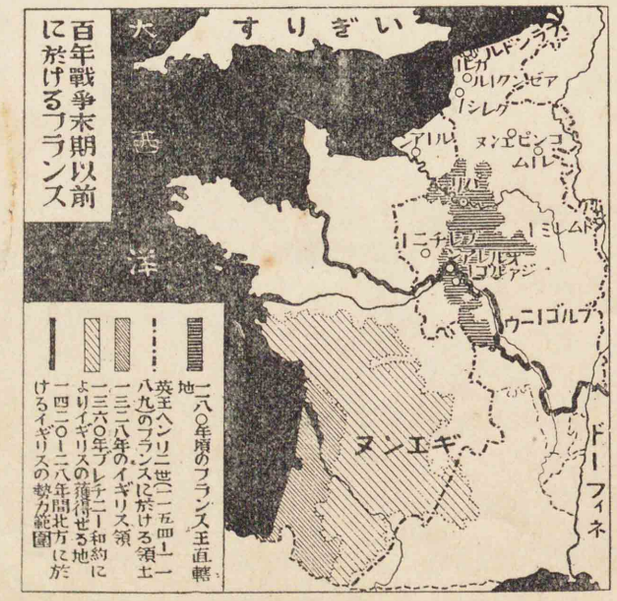
大西洋　海　中　地　黑海　カスピ海　カッパ　エルサレム

第一回十字軍　第二回十字軍　第三回十字軍

ルサレムは全くトルコ人の手に歸するに至れり。

レムを略して、聖地を回復し、イエルサレム王國を建設したり。既にして、イエルサレムはトルコ人に侵入せられ、危急なりしかば、第二十字軍を起しし、救援の目的を達する能はざりき。これよりトルコの勢益〻強く、遂にイエルサレム王國を滅ぼせり。かくて、十字軍は一、二九一年に至るまで、前後七回の遠征ありしも、遂に功を奏せず、イエ

ジャンヌ・ダルクの像



第四章　百年戰爭　オスマンリ・トルコの勃興　文藝の復興

第七表

紀西	イギリス	フランク	西南アジア	東洋	日本
1300					(1281)弘安の役
1200	(1215)大憲章發布		(1291)アッカ陷落	(1237)モンゴルのロシア侵入	
1100	(1066)ノルマンディー公のイギリス征服	(987)カペー家開始	(1273)ハプスブルグ伯ルドルフドイツ王となる	(1115)金興る	(1087)院政治る
1000		(911)ノルマンディー公の起源	(1077)ヘンリ四世法王に謝罪す	(960)宋興る	(940)將門誅せらる
900	(827)エグバート王の統一	フランス(843)ベルダン條約	(962)オットー一世神聖ローマ皇帝となる (911)カロリンガ王統斷絶す		
800		ドイツ	(1096)第一十字軍の出征		

百年戰爭（西紀一三三九年―一四五三年）

原因

戰況

ヂアンヌ・ダルク起る（西紀一四二九年）

百年戰爭

フランス國内には早くより英王の私領ありて、紛爭起り、兩國民は相反目せり。一三二八年カペー家の男系絶え、バロア家代りて、王位を繼承しけるが、英王エドワルド（イギリス王）三世はカペー家なるフィリポ四世の外孫なれば、王位相續の權ありと稱へ、大軍を發してフランスに侵入せり。

これより兩國の攻爭は百餘年間に亙り、フランスは屢敗れ、國運甚だ危かりき。然るにジアンヌ・ダルクと呼べる一少女起り、神託を受けたりと稱し、自ら陣頭に立ちて、軍氣を皷舞し、オルレアンの孤城を救へり。これより佛國の士氣大いに振ひ、遂に英兵を國外に擊退することを得たり。

フランス、カペー朝及びバロア朝略系

カペー……フィリポ三世―フィリポ四世―ルイス十四世
　　―フィリポ五世
　　―カロロ四世
　　―いさべら（イングランド王）―エドワルド二世―エドワルド三世

―カロロ（バロア伯）―フィリポ六世（バロア朝始祖）―ジョアン―カロロ五世―カロロ六世―カロロ七世―ルイス十一世

オスマン（西紀一二八八年―一三二六年）

オスマンリ・トルコの勃興　オスマンリ・トルコは、もと裏海の東方に住せしが、蒙古族に逐はれて、小アジアに移りぬ。酋長オスマンの時に及び、四隣の地を征服して、オスマン帝國を建てしが、其の後國勢次第に振ひ、十四世紀の末、バルガン半島の諸國を略し、遂にコンスタンチノプ

ラファエロの像

ミケランジェロの像（自畫の肖像）

アンゴラの戰（西紀一四〇二年）

ムハメッド二世（西紀一四五一—八一年）

東ローマ帝國の滅亡（西紀一四五三年）（後花園天皇の朝）

ルを圍めり。然るに當時テムチンの後裔なるチムルは中亞・東歐を征略し、勢威甚だ盛なりしが、東ローマ皇帝の請に應じて、來り援ひ、トルコ軍をアンゴラに擊破せり。チムルの歿後、トルコ人は再び勢を得、ムハメッド二世は遂にコンスタンチノプルを陷れて、都をここに奠め、東ローマ帝國全く滅びき。時に一、四五三年にしてコンスタンチヌスの奠都より、一、一〇〇餘年を經たり。

ムハメッド二世の像

オスマンリ・トルコ、スルタン略系

オスマン—ウルカン—ムラッド一世—バヂァシッド—ロ—ロ—

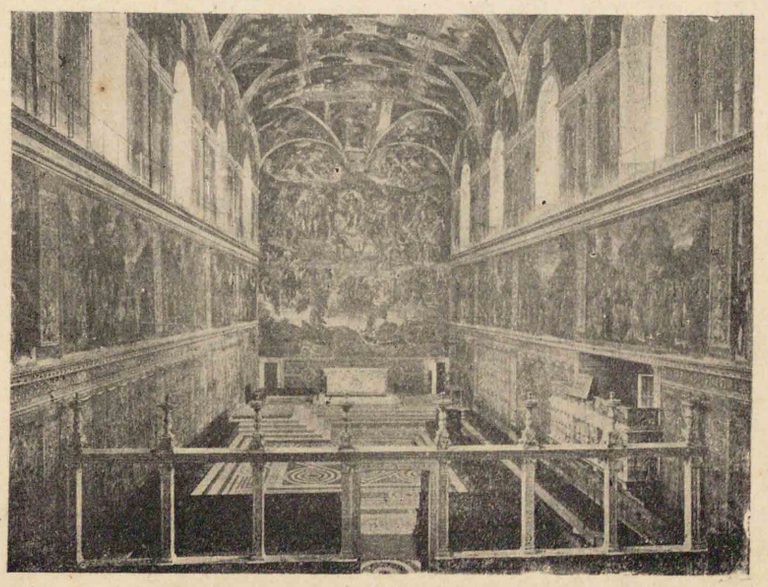
—ムハメッド二世

文藝の復興

中古の中頃まで、ヨーロッパ諸國の學藝

は大いに衰微せしが、十字軍の結果、封建制度の頽廢を招き、産業・交通盛に興るに及び、大いに知見を廣め、人心漸く振ひしかば、十三世紀の末頃より、イタリアに於て、ギリシア・ラテンの古學を研究する風起れり。東ローマ帝國滅亡の後ギリシアの學者、古書を抱きて、イタリアに避難す

古學の復興

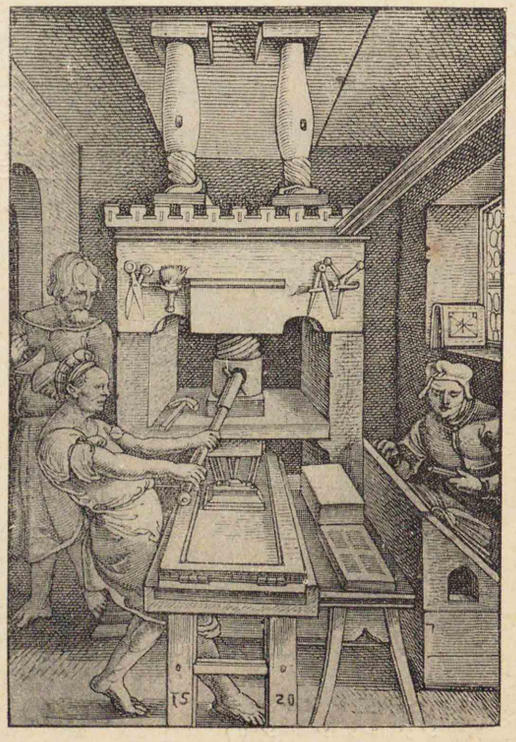


パチカノ宮殿内部（彫刻はミケランジェロの作）

るもの多かりしかば、キリスト教の束縛を離れて、益自由に研究するに至れり。又、美術にも古式の復興行はれ、ラファエロ及びミケランジェロの如き名手出で、尚、十五世紀の中頃、ドイツのグーテンベルヒは、活版術を發明し、大いに知識の普及を助け、歐洲近世の文化は次第に發展するに至れり。

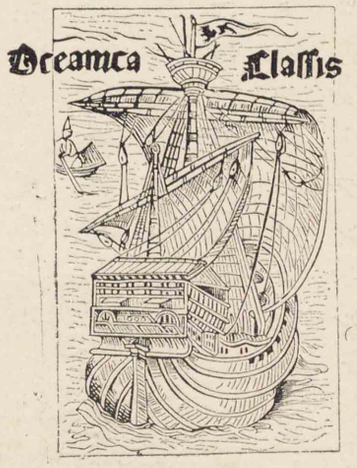
美術の復興

活版術の發明



活版印刷術の始

第五章　地理上の發見



イスパニアの船
(アメリカ發見當時)

航路探檢の動機　十三世紀の中頃に至り、ベネチアの人マルコ・ポロ、元の世祖に仕へ、歸國の後、其の見聞錄を著ししより、利を東方に探らんとする氣運、大ひに起れり。されど、トルコ人は東洋の貨物に重稅を課し、イタリアの

ポルトガル王子ヘンリの像
(ロンドンナショナル博物館所藏の銅版畫)

諸市、其の通商を獨占せしかば、西歐諸國は當時、支那より傳來したる磁針を巧に應用して、東方貿易の新航路を求めんとするに至れり。

インド航路の發見　ポルトガルの王子ヘンリ、十五世紀の初め、率先して航海を奬め、頻りにアフリカの西岸を

バスコ・ダ・ガマの像

ヘンリ王子(西紀一三九四年―一四六〇年)

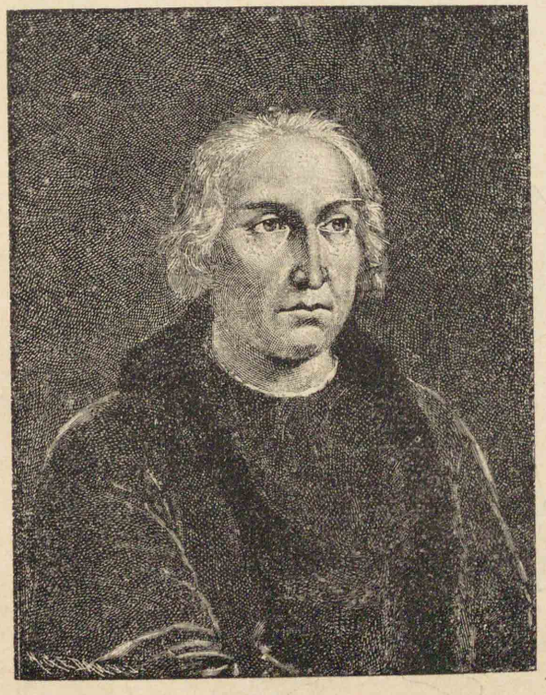
インド航路發見（西紀一、四九八年）（後土御門天皇の朝）（明の孝宗の世）

コロンブス（西紀一、四三五年―一、五〇六年）

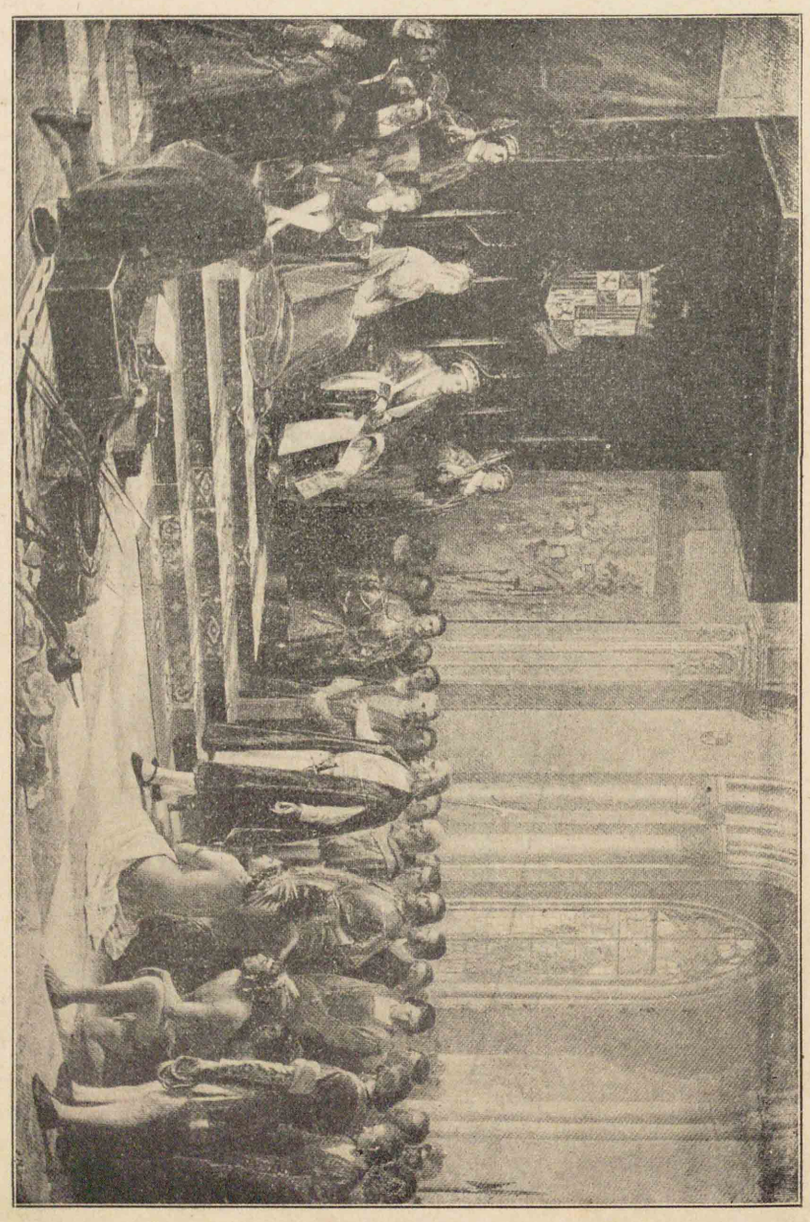
探檢せしめき。一、四八六年ヂアスは遂にアフリカの南端喜望岬に達し、次いで一、四九八年バスコ・ダ・ガマは始めて之を回航して、インドの西南岸に達し、多年の宿志を全くしたり。

○アメリカ發見及び世界週航

これより先、ジェノバ人コロンブスはインドに到る捷路は大西洋を西航するにありと信じ、西歐諸



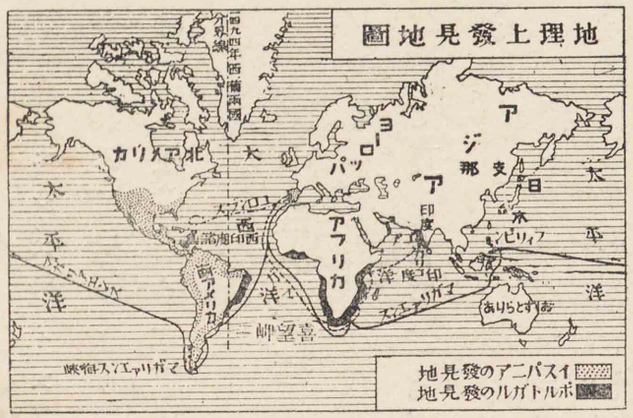
コロンブスの像



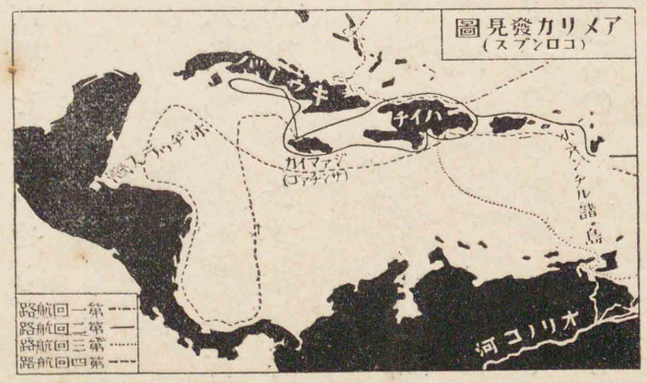
圖の見謁に王女ゐ及王アニバスイ後の海航一路ゐスパンロコ

アメリカ發見（西紀一、四九二年）（後土門天皇の朝）（明の孝宗の世）

マガリアエンスの出發（西紀一、五一九年）



國の王に說きしも、皆、用ひられず、大ひに失望せしが、遂にはイスパニアの王后イサベラの贊助を得、一、四九二年西航すること七十一日にして、今の西インドの一島に達し、新大陸發見の端緒を開けり。また一、五一九年、ポルトガル人マ



世界一周（西紀一五二二年）（後柏原天皇の朝）

ガリアエンスはイスパニア王の命を奉じて世界週航を企て、其の身はフィリピン群島にて歿せしも、其の船隊中の一隻は、恙なく本國に歸り、始めて世界を週航せり。

中古の概括

年代　中古期は五世紀頃より十六世紀頃まで、約千百年間に亙り、我が仁德天皇の朝より、足利氏の末までに當れり。

變遷　初、ゲルマニ諸民族の勃興するや西ローマ帝國は遂に瓦解を招きしが、三〇〇餘年の後カロロ大帝はこれを再興し、更に百餘年を經てオット大帝の神聖ローマ帝國興るに至れり。然るにキリスト教の隆盛と共にロ

ーマ法王は天下の教權を掌握し、更に政權を得んとして、久しく皇帝と爭ひしが遂に相共に衰へ、十字軍の後は封建制度次第に廢頽して、西歐諸國に王權の確立を見るに至れり、東ローマ帝國はサラセン、セルジュク・トルコ・蒙古人等の侵略に苦しみ、最後にオスマンリ・トルコのために滅ぼされたり。

文化　ゲルマニ蠻族の侵入後は文化廢れて所謂暗黑世界となりしが、勇壯質實の蠻族はキリスト教に感染して、近世文化發現の基をなしぬ。また封建制度は其の精華として武士道を發達せしめ、サラセン人は數學・天文・哲學等を傳へて、文化の進歩に資するところ多し。十字軍は知見を擴め、産業通商を活潑ならしめ、東ローマ帝國の

滅亡と相待ちて、古學の復興、自由講究の氣風を喚起し、諸種の發明・地理上の發見は更に社會の耳目を一新し、國力伸張の天地を擴大せしめたり。

第三編　近古

第一章　宗教の改革

宗教改革の唱道

中古の末頃、ローマ法王は專横を極め、教會の腐敗、僧侶の非行甚だしかりき。又學問の復興、及び地理上の發見ありて、人智大いに進みしかば、宗教の現狀に對し、非難の聲漸く高まりぬ。法王レオ十世、寺院建立の資を得んがため、盛に罪障消滅札を賣らしむるに及び、ドイツの僧マルチ

教會の腐敗

人智の進歩

罪障消滅札の販賣

罪障消滅札の發賣

マルチン・ルーテルの反抗（西紀一、五一七年）（後柏原天皇の朝）（明の武宗の世）

カロロ五世

ウォルムス會議（西紀一、五二一年）

ン・ルーテルこれを憤慨して、大いに其の不法なることを論じ、一、五一七年、九十五個條の意見書を發表せり。法王これを怒り、ルーテルを破門せしが、ルーテルは深く決する所ありて、其の破門狀を燒き棄てたり。

マルチン・ルーテルの像

新教の傳播　當時、イスパニア王にて、ドイツ皇帝の位を繼げるカロロ五世は、父母兩家の領土を併有し、其の富強歐洲に冠たり。よりて法王は、カロロ五世に援助を求めしが、カロロは、其の頃イタリアにて佛王と爭ひ居たりしかば、法王の歡心を得ん爲、國會をウォルムスに開き、ルー

アウグスブルグの宗教會議（西紀一、五五五年）（後奈良天皇の朝厳島の戰の年）（明の世宗の世）

テルを招き、其の說を棄てしめんとせしも、ルーテル、正理を固守し、斷然として、これを斥けたり。帝はイタリア出征後、再び國會を開き、改革說の禁壓を圖りしに、所謂新教徒はこれに抗議し、つぎて同盟を結び、佛王もこれを助けしかば、カロロ五世は新教撲滅の難きを見、一、五五五年、アウグスブルグの宗教會議に於て、信徒の自由を許せり。かくて新教は、北歐の

カロロ五世の像（一、五三一年パルテルベルムの銅版に據る）

エスイタ教會の設立

サビエルの日本傳道（西紀一五四九年）（後奈良天皇の天文一八年）

ゲルマニ人の諸國に傳播して、益其の勢力を得たり。

宗教改革の反動　新教の勃興により、舊教徒は大いに刺戟せられ積弊を刷新するの氣運に向ひぬ。偶イスパニア人、イグナチオ・ロヨラは、志操堅實の同志と共に、エスイタ教會を起し、嚴格なる規律を設け、專ら法王の威權を回復せんと計れり。殊に其の宣教師は海外の布教につとめ、エスイタ教會の創立に與りたるフランシスコ・サビエルは、我が國に渡來し、足利氏の末、始めて天主教を傳へぬ、所謂切支丹宗これなり。

イグナチオ、ロヨラの像

ハプスブルグ家略系

ハプスブルグ家の分脈（西紀一五五六年）

フィリポ二世の領土

（カスチリア女王）いさべら
（アラゴン王）
フェルヂナンド
（ドイツ皇帝）
マキシミリアノー
（ハプスブルグ家）
フィリポ
（イスパニア王）（ドイツ皇帝）カロロ五世
（イスパニア王）フィリポ二世
（ドイツ皇帝）フェルヂナンド一世

第二章　十六世紀末の西歐諸國

イスパニアの盛衰　アウグスブルグ宗教和議の翌年、カロロ五世は、自ら隱退するに當り、弟フェルヂナンドにドイツの帝位を讓り、子フィリポ二世にイスパニア王位を傳へたり。フィリポ二世時代のイスパニアの領地は、イタリア・ネーデルランド・アメリカ等に跨り、其の富强遙に列國

を凌げり。王は領内各地の特權を奪ひて之を統一せんとし、また歐洲舊教徒の盟主を以て自ら任じたり。然るにオランダはこれに反抗し

フィリポ二世の像

オランダ獨立の起因

オランダ獨立軍起る（西紀一五七二年）（正親町天皇の朝）（明の穆宗の世）

て、獨立を計り、イギリスは王の大艦隊を擊破せしより、イスパニアの國運漸く衰ふるに至れり。

オランダの獨立　ネーデルランドは、夙に商業發達し、其の民は多く新教を奉ぜしが、フィリポ二世の、宗教・政治上の壓迫に反對し、オランイエ公ウィルレムを總督として、獨立軍を起せり。ウィルレム沈勇にして大度あり。イスパニアの大軍と戰ひ

オランイエ公ウィルレムの像

オランダの建國（西紀一、五八一年）

オランダの獨立（西紀一、六〇九年）（後陽成天皇の慶長一四年）（明の神宗の世）

毫も屈せず。既にして南部諸州は、イスパニアに歸順せしも北部七州は同盟を結び、一、五八一年獨立を宣言せり。其の後ウィルレムは刺客に暗殺せられしが、オランダ人は、英王エリザベタの援助を得て勢、盛なりき。

フィリポ三世立つに及び、遂にオランダと休戰を約しオランダは事實上全く獨立せり。

イギリス、チューードル家及び關係略系

- エドワルド三世……ヘンリ七世
  - ヘンリ八世
    - フィリポ二世（イスパニア王）
    - まりあ
    - エドワルド六世
    - えりざべた
    - まーがれっと（スコットランド王）
    - ジェームス五世
      - まりあ（フランス王）
      - ジェームス（フランシス二世）

ヘンリ八世（西紀一、五〇九―一、五四七年）

イギリス教會の起源（西紀一、五三四年）

エリザベタ女王（西紀一、五五八―一、六〇三年）

イギリスの隆盛　宗教の改革ドイツに起りし頃、イギリスには、ヘンリ八世位にありて、舊教を保護せしが、皇后廢立のことにつき、ローマ法王と爭を生じ、遂に法王と絶ち、自らイギリス教會の首長となれり。十六世紀の中頃、女王エリザベタ立つに及び、明敏にして、よく人を用ひ、イギリス教會を國教と定めたり。時

エリザベタ女王の像

第八表

西紀		日本	洋東	ドイツ	歐東	ポルトガル	オランダ	イギリス	フランス
1400		(1334)建武中興	(1368)明太祖立つ						
		(1467)應仁の亂起る	(1510)葡人ゴア略取						
1500				(1517)ルーテル宗教改革唱道	(1453)東ローマ帝國滅亡	(1498)印度航路發見	(1492)コロンブス發見 (1479)アラゴン、カスチリア合併	(1453)百年戰爭終る (1339)百年戰爭起る	
							(1522)世界一周		
							(1579)ユトレヒト同盟		
									(1643)ルイス十四世即位 (1598)ナントの勅令發布
									(1789)大革命起る
								(1642)革命起る (1588)必勝艦隊擊破	
								(1783)北米合衆國獨立	
1600				(1555)アウグスブルグ宗教和議					
				(1618)三十年戰役起る					
				(1648)ウエストフアリア條約					
				(1756)七年戰役起る					
				(1740)フレデリキ大王即位					
1700				(1682)ペテロ大帝即位					
				(1689)ネルチンスク條約					
				(1757)クライブの勝利					
				(1762)カタリナ二世即位					
				(1616)清太祖皇帝と稱す					
				(1788)安南清朝貢國となる					
		(1681)綱吉將軍となる (5192)秀吉征韓の役起る							
		(1787)家齊將軍となる							
1800									

必勝艦隊の破滅（西紀一、五八八年）（後陽成天皇の天正一六年）（明の神宗の世）

英國の隆盛

に國内の舊教徒は、スコットランドの女王マリアの即位を望み、イスパニア王フィリポ二世の援を借りて、事を擧げんと計りしかば、女王は遂にマリアを死刑に處しぬ。是に於てフィリポは大艦隊を編成して、必勝艦隊と稱し、イギリスに來襲せしむ。英艦逆へ擊つて、大いに之を破りぬ。これより英國の國運大いに進み、海軍の勃興・航海・殖民の擴張、商工業の發達共に著しく、英國現今の富强の基をなせり。文學もまた大いに興り、大文豪シェクスピアを始め、多くの大家輩出せり。

シェクスピアの像

第三章　十七世紀に於ける歐洲諸國の情勢

ハプスブルグ家略系

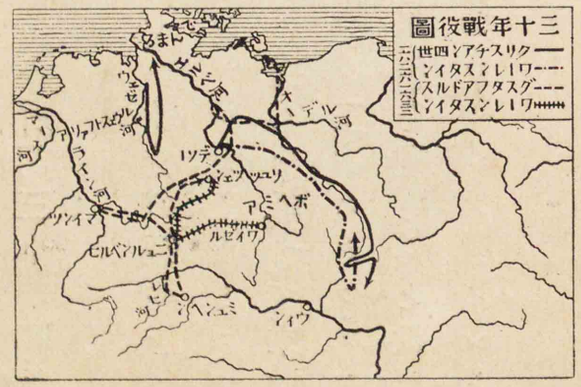
フェルヂナンド一世
カロロ（スチリア侯）
フェルヂナンド二世
フェルヂナンド三世

戰爭の原因

ボヘミアの反亂

（西紀一六一八年）（後水尾天皇の元和四年）（明の神宗の世）

三十年戰役　ドイツに於ては、新舊兩教徒の爭、暫く止みたりしが、其の後再び軋轢起りぬ。然るに、舊教を尊奉せるフェルヂナンドが、ボヘミアの新教徒を抑壓せ



戰況

ボヘミアの討平

キリスチアン四世の侵入

グスタフ・アドルフの侵入

ウエストフアリア條約（西紀一六四八年）（後光明天皇の慶安元年）

んとするに及び、國内は大いに亂れ、かの所謂三十年戰役起れり。

フェルヂナンドのドイツ皇帝となるや、舊教徒の援助を得て、一時叛亂を鎭定せり。程なくデンマルク王キリスチアン四世、英・蘭二國の軍資を得、新教の擁護を唱へて、來援せしが、遂に敗れたり。時にスウェーデン王グスタフ・アドルフは、新教徒を救ひ、兼ねて北歐の覇權を握らんと欲し、英・佛兩國に結び、ドイツに侵入し、名將ワレンスタインと戰ひ、不幸にして戰沒したり。

其の後フランスは、スウェーデンを援けて、ドイツを侵略せしが、一、六四八年遂にウェストファリアの和約を結べり。此の戰役によりドイツは其の統一を失ひ、人口減少し、產業

グスタフ・アドルフの像

ワレンスタインの像

衰へ、都鄙共に悲慘に沈みたり。

ウェストファリア條約要項

一、新舊兩教の同權
二、フランスは、ツール・エルサス等を得
三、スウェーデンは、ポメラニアの西部とドイツ議會に參列する權を得
四、スウィス、オランダ兩國の獨立公認

ヘンリ四世 リシュリュー（西紀一六五八年―一六四二年）

マザレンの功（西紀一六四二年―一六六一年）

フランスの强盛　これより先フランスにおいては明主ヘンリ四世出で新舊兩教徒の爭亂を定めしが、十七世紀の初に至り賢相リシュリュー、マザレン等相次ぎて、佛王を輔佐し、内は諸

ルイス十四世（西紀一六四三年―一七一五年）（我が元祿時代頃）

内治外侵

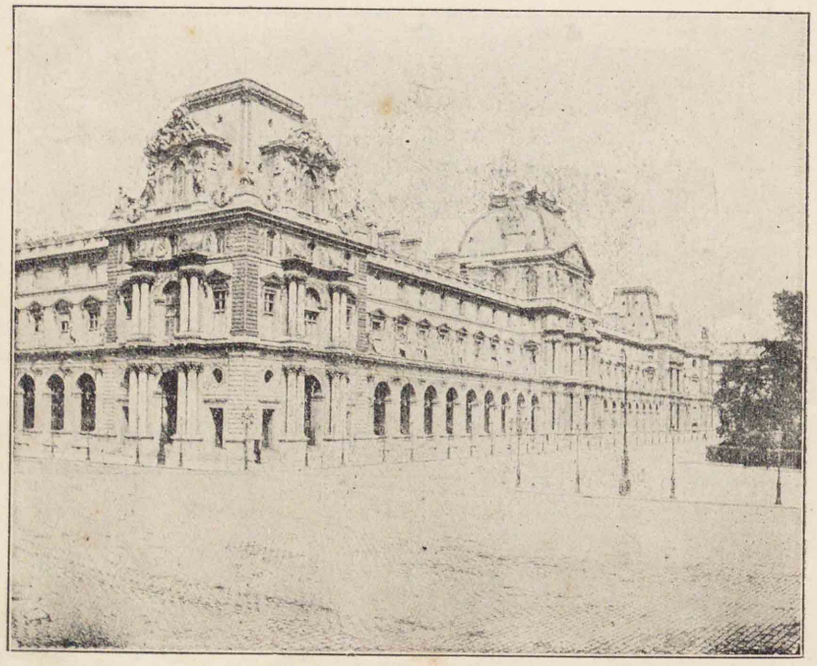
ルイス十四世の驕奢

侯を抑へて、國家の統一を固くし、外は三十年戰役に干渉して、國威を揚げ領土を擴張したり。英邁なるルイス十四世、親ら政を執るに及び、人材を登用し、財政を整へ、産業貿易を奬勵して、國勢の振起を計り、更にネーデルランド・オランダ・ファルツ等に侵入して西歐諸國と戰ひ、其の領地を增加せり。實に王の治世は、フランス王政の極盛時代にして、當時歐洲第一の强國たりき。王はまた莊麗なるベルサイユ宮殿を興して、榮華を極め、大いに文學美術を奬勵せしかば、文運盛に興り、各國競うてフランスの風尚を摸するに至りぬ。

イギリスの變遷　イギリス女王エリザベタの歿後、スコットランド王ジェームス一世、入りて英王の位に卽きスチュアルト朝の祖となりしが、

ルイス十四世の像

リシュリュー の像



ルーブル宮殿

其の後屢國王と國會との衝突ありき。國會黨の名將クロムウェルは、一時王政を廢して共和制を建て自ら總督となり、內は武斷政治を行ひて風紀を肅正し、外はオランダを抑へて商權を奪ひ、大いに國威を振へり。されど間もなく王政復古し憲法政治も發達するに至れり。

クロムウェルの像

第四章　南洋及び東洋に於ける葡萄牙・西班牙・和蘭・英吉利

ポルトガル人

ポルトガル及びイスパニア　バスコ・ダ・ガマが、印度航路を發見してより、ポルトガル人は、ゴアを中心として、盛

に印度と通商せり。

支那との通商

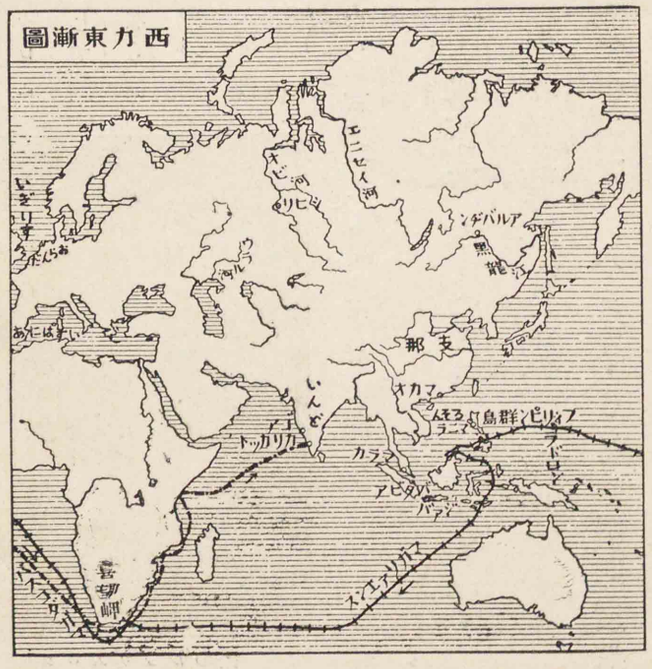
にて支那と貿易を始め、マカオを租借し、また我が國にも來り、肥前平戸に於て通商を營み、一時東洋の商權を握れり。

日本との通商

イスパニア人

イスパニア人は西方への航海に從事せしが、ポルトガル人につぎて東洋に來り、一、五七一年全くフィリピン群島を征服し、マニラ

フィリピン征服


西力東漸圖
ヒニヒ人
ンダバルア
黑龍
支那
オカフ
ムそろ
ラニマ
島群ピリフ
ドロと
カラ
アビタル
ハワイ
ポルトガル
ヒスパニア
ナポリ
ローマ
ジェノバ
ベニス
ロンドン
ハンブルク
ウィーン
ポーランド
ロシア
ペルシア
アラビア
エジプト
トルコ
ギリシア
ローマ
ポルトガル
ジェノバ
ベニス
ナポリ

バタビア府の建設（西紀一、六一九年）（後水尾天皇の元和五年（明の神宗の末年）

オランダ人の日本通商（西紀一、六〇九年）

英人東インド會社を建つ（西紀一、六〇〇年）（後陽成天皇の朝關ヶ原の戰の年）（明の神宗の世）

マドラス府を開く（西紀一、六三九年）（明正天皇の世）

機敏なりしかば、遂に東洋貿易の覇權を握り、ジャバにバタビア府を建てて、根據地とし、次第に葡・西兩國より其の領地と通商の利とを奪へり。一、六〇九年、遂に我が國に來りて通商の許可を得、島原の亂後も、獨りオランダ人のみは長崎にて通商するを許されぬ。

イギリス　イギリス人は、十六世紀の末頃より、インドに來航して貿易を營みしが、一、六〇〇年に至り、ロンドンの商人は資力を合せて、東インド會社を創立せしより、大いに勢力を得たり。後、我が國に渡來し、通商を許されしも、オランダ人との競爭に堪へず、其の商館を撤せり。されどインドに於ては、次第に勢力を振ひ、ポルトガル人と競爭して之に勝ち、一、六三九年に及びマドラス府を開き、

つぎてベンガル・ボンベー・カルカッタを建つるに至れり。

西力東漸年表

西紀	事蹟
1480	
義尚	
義稙	(1492)コロンブス西印度を發見す
1500	(1498)バスコ・ダ・ガマ印度に達す
義澄	
義稙	(1511)葡人マラッカを取る
1520	(1517)葡人廣東にて通商す
義晴	(1521)マガリアエンス、フィリピンに死す
1540	(1543)葡人我種子ケ島に來る
義輝	
義榮	
1560	(1565)フィリピン群島西領となる
義昭	
信長	(1571)フィリピン西班牙に征服せらる
1580	(1579)英人初めてインドに來る
秀吉	
秀次	
1600	(1600)英人東インド會社を起す
家康	(1602)オランダ東印度會社起る
秀忠	(1609)我國はオランダ人に通商を許す
	(1613)我國は英人に通商を許す
1620	(1619)オランダ、バタビア府を建つ
家光	
1640	(1639)英人マドラス府を開く
家綱	
1660	(1651)ハバロフ、アルバシン城を立つ

モスクワ公國
イバン三世（西紀一四六二年―一五〇五年）
（義政・義澄）
イバン四世（西紀一五三三年―一五八四年）
（義晴・秀吉）
ミカエル・ロマノフ（西紀一六一三年―一六四五年）
（秀忠・家光）
ペテロ大帝（西紀一六八二年―一七二五年）

第五章　ペテロ大帝

ペテロ大帝前のロシア　ロシアは、建國以來、久しくモンゴル人の治下に苦しめられしが、モスクワ公國次第に勢力を振ひ、十五世紀の末、イバン三世立つに及び、キプチャク國を滅ぼして、ロシア統一の基を開けり。イバン四世立ち、始めて皇帝（ツアール）の尊稱を用ひ、またシベリア拓殖の端緒を開けり。然るに其の後帝統絶えて、國内は大に亂れしが、十七世紀の初に至り、ミカエル、國内を統一して遂に帝位に登り、ロシア現代の帝室たる、ロマノフ家の祖となれり。

ペテロ大帝　十七世紀の末に、ペテロ一世位に即く。剛毅にして大志あり、ロシアが良好の港灣なく、其の文化

（綱吉・吉宗）
ロシアの國情
大帝の旅行
大帝の新政
北方戰役（西紀一七〇〇年―一七二一年）
（綱吉・吉宗）
原因

遙に西歐諸國に及ばざるを慨し、先づトルコを討ちて、アゾフ海の沿岸を略取し、つぎてドイツ・オランダ・イギリス等の諸國を巡遊し、親しく其の制度文物を視察し、オランダにて自ら職工の間に交りて、造船術を學べり。かくて學者・軍人・技師等を聘して國に歸り、大いに制度風俗を改良して、社會を一新し、軍備を擴張し、產業を奬勵して、國勢の振興を計れり。

ペテロ大帝の像

北方戰役　當時スウェーデンは、バルト海沿岸の大半を領有して、國勢盛なりき。ペテロ大帝は、バルト海に港灣

戰況

を得んことを望み、デンマルク及びポーランドと結びて、スウェーデンを分割せんと計りぬ。スウェーデン王カロロ十二世は、年尚若けれども雄略あり。一、七〇〇年、先づ自ら大軍を率ゐて、デンマルクに侵入し、進んでロシアの大軍を撃破し、轉じてポーランドに入り、其の王を廢せり。大帝は其の間に兵を練り、バルト海の東岸を略取し、新都ペテルブルグ府を建設したり。其の後カロロは、再びロシアに侵入せしも

カロロ十二世の像

ペテルブルグの創建（西紀一七〇三年）（元祿一六年）

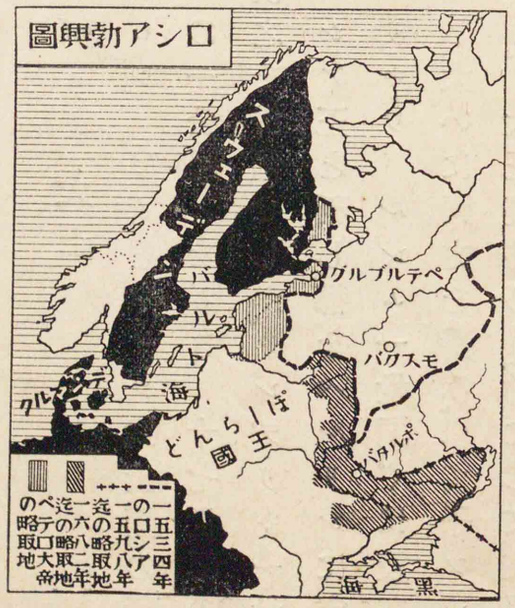
（清の聖祖の世）

結果

ポルタバの役に大敗して遂に其の志を果さざりき。かくて一、七二一年、兩國遂に和議を結び、ロシアはバルト海東岸の地を得て、北方の强國となり、スウェーデンは復、振はずなりぬ。

ロシア、ロマノフ家略系

ミカエル・ロマノフ
アレキセイ
イバン五世
ピヨートル
フェオドル
そふいあ
あんな
ピヨートル
イバン六世



第六章　フレデリキ大王

プロシアの勃興　プロシアは、もとドイツ武士團の所領にして、後、ポーランドの一公國となりき。十七世紀の初、ブランデンブルグ侯之を併領せしが、フレデリキ一世立つに及び、始めてプロシア王と稱し、都をベルリンに定めたり。王の子フレデリキ・ウィルレム一世嗣ぐに及び、勤儉尚武の主義を嚴守し、大いに國力を養ひ、以て子フレデリキ二世(大王)に及べり。大王英略あり、幼にして文學

起源

フレデリキ大王

ペテロ一世(大帝)
- ペテロ二世
- ペテロ三世
- パウロ一世
- かたりな二世
- えりざべた

を好み、後、父王の命により嚴格なる教育を受け、軍事に精通せり。一、七四〇年位を繼ぐに及び、父王の遺せる資財と精兵とを利用して、大いに爲すことあらんとせり。

プロシア、ホーヘンツォルレン家略系

(ブランデンブルグ侯)
シギスモンド―ジガルジ・ウィルレム―フレデリキ・ウィルレム―
(プロシア侯)
フレデリキ一世―フレデリキ・ウィルレム一世―フレデリキ二世(大王)

オーストリア繼承戰役(西紀一七四〇年―一七四八年)(吉宗家重)(清の高宗の世)

原因
經過

オーストリア繼承戰役　時にドイツ皇帝カロロ六世男子なかりしかば、皇女マリア・テレサを後嗣に定めしが、帝の崩後、國内の諸侯異議を唱へ、諸外國の援を得て、相續を爭へり。大王は此の紛亂に乘じて、急に墺領シレシアを占領せり。テレサ已むを得ずして、シレシアを大王に

七年戰役

オーストリア繼承戰役關係系圖

（ドイツ皇帝）
フェルヂナンド一世……レオポルド一世
- ヨセフ一世
  - まりあ・よせふぁ（サクソニア侯）
  - まりあ・あまりあ（バワリア侯）
- カロロ・アルベルト
- カロロ六世
  - まりあ・てれさ
  - フランシス一世
    - ヨセフ二世

フレデリキ六王の像
（一七六四年出版の銅版畫によるる）

七年戰役

マリア・テレサは、深くプロシアを怨み、機を割き、ホンガリア人の援を得て、諸國の聯合軍と戰ひ、其の領土の大半を保全したり。

（西紀一、七五六年―一、七六三年）
（家重―家治）
（清の高宗の世）

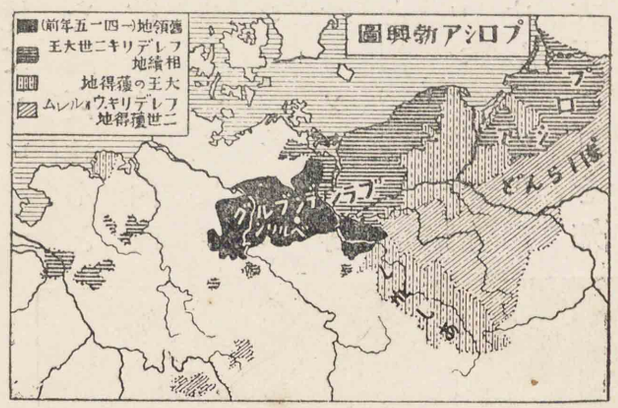
原因

見てシレシアを回復せんと欲し、まづ内政を整へ、更にロシア・フランス・サクソニア等と相結びて、プロシアを分割せんとせり。大王これを知り、佛國と相爭へるイギリス

マリア・テレサの像

戰況

の援を得、敵に先んじて、急に兵をサクソニアに進めしかば、かの所謂七年戰役起りぬ。



この役の初、大王は切りに敵軍を撃破せしが、澳・露の聯合軍に破られしより、形勢一變して、プロシアの兵數漸く乏しく、イギリスも軍資の發送を止めしにより、頗る悲境に陷りしかど、大王は非凡の智略と、不撓の精神とを以て、四面の敵に當れり。既にして露帝ペテロ三世立つに及び、大王の英風を敬慕して、プロシアを助け、つぎて

講和

戰後のプロシア

アメリカに於ける英佛殖民地の觸接

英・佛兩國の和議成りて、佛國はドイツより兵を退けしかば、一、七六三年大王はシレシアを領有して、遂にオーストリアと和するを得たり。かくて大王は大いに武威を輝し、又、戰後の經營に意を用ひしかば、プロシアの國勢大いに振ひ、ヨーロッパ強國に伍するに至れり。

第七章　殖民地に於ける英・佛人の衝突

英・佛の殖民地　イギリスは、イスパニア・オランダにつぎて、大いに殖民を企て、エリザベタ女王の世、始めてアメリカにバージニアの殖民地を立て、次第に繁榮に赴き、十八世紀の初に及び、北アメリカ東岸一帶の地を領有するに至れり。フランスは、十六世紀の末より、次第にセント・

インドに於ける英佛の對抗

ローレンス河畔に殖民地を開き、後、ルイス十四世の頃、ミシシッピ河流域に、ルイジアナの殖民地を建て、イギリスの殖民地と相接するに至れり。是より先、イギリス人は、東インド會社を起し、マドラスを根據として、インド經略に着手するや、フランス人もまた東インド會社を設け、ポンヂシェリーに據りて、英人に對抗せり。

英・佛殖民地の戰爭　これらの殖民地にては紛爭常に

北アメリカに於ける英佛の衝突

インドに於ける英佛の衝突　クライブ（西紀一七二五年―七四年）（吉宗家治）（清の高宗）

絶えず、且、本國の衝突ある毎に相戰へり。七年戰役起るに及び、イギリスは、連りにアメリカに於けるフランスの殖民地を攻撃し、遂に廣大なるカナダを略取せり。また當時インドの南部にては、フランス人全權を握りて、勢力盛なりき。然るに英國東インド會社の書記クライブ英略ありて、大いにフランスとベンガル王の同盟軍を撃ち破り、インド諸邦の

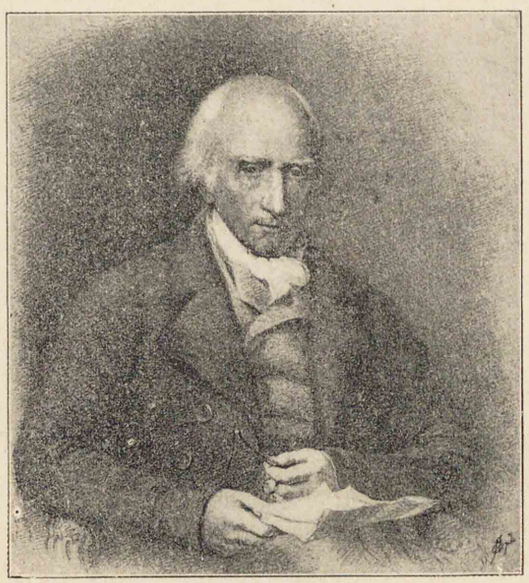
クライブの像

イギリスの勝利

パリの和約（西紀一七六三年）（家治の代）

侵略を始めしかば、フランスの勢、復、振はずなりぬ。

パリの和約 七年戰役中、フランスが、主として、ヨーロッパの攻戰に從へる間に、イギリスは全力を殖民地の攻略に注ぎしかば、殖民地の衝突は常にイギリスの勝利に歸せり。一、七六三年、パリの和約成るに及び、イギリスはフランスのカナダ、イスパニアのフロリダ等を得、フランスはイスパニアに、ルイジアナを與へたり。



ヘースチングスの像

イギリス、インド經略の進歩

かくてイギリスの殖民地は、大いに增大せしが、其の後ベンガルの知事ヘースチングス、始めて印度總督に任ぜられ、頻りに、土人の諸侯を破りて、クライブの遺業を擴張・整理せしかば、イギリス人の威令、全インドに及び、莫臥兒帝も其の保護を仰ぐに至れり。

第八章　アメリカ合衆國の獨立

獨立の遠因

獨立の原因 イギリスの北アメリカ殖民地は、次第に富榮に向ひしが、其の開拓者は、もと信仰の自由を得んがため、移住したる者多ければ、獨立自治の精神に富み、生業上に於ける本國の政令にも不平なりき。

獨立の近因

然るに英國にては、多年佛國と戰ひて、財政の困難甚だしかりしかば、ア

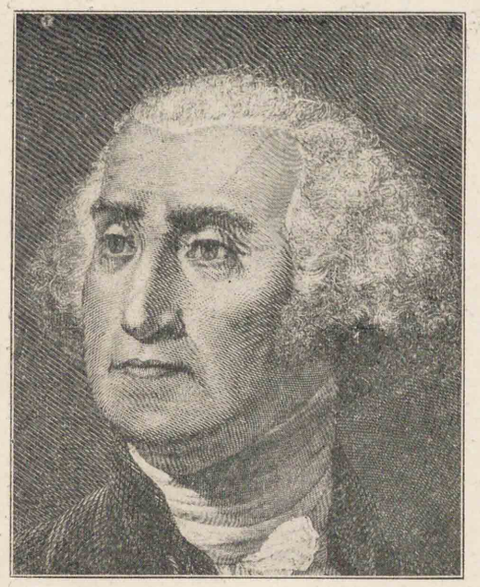
印紙條例（西紀一、七六五年）（家治の世）

新課稅

ウォシントン

獨立の宣言（西紀一、七七六年）

メリカ殖民地に徵稅せんため、印紙條例を發布せり。是に於て、殖民地は、自ら代議士を出さざる本國議會の議決には服し難しと唱へ、力を極めて反對せり。やがて政府は此の條例を廢止せしも、更に茶及び其の他の貨物に課稅せしかば、人心愈動搖し、十三州の殖民地は、遂に同盟して兵を擧げ、ジョージ・ウォシントンを總督とし、一、七七六年、獨立宣言書を發表せり。



ウォシントンの像

ウォシントンは、高潔の君子にして、堅忍不拔の氣象あり。十歲にして父を喪ひ、母の手によりて敎養せられき。母の名をメリーといふ。才德ありてよく子女を敎育し、勤儉にしてよく家道を守れり。ウォシントンがアメリカ合衆國の獨立に際し、殊勳をたて、世界の偉人となるを得たるは、其の母に負ふ所甚だ多かりき。

獨立軍の不利

ヨークタウンの戰（西紀一、七八一年）

獨立の承認（西紀一、七八三年）（我が天明三年）

獨立戰役　かくて、イギリスは大軍を發して、これが鎭壓に努め、アメリカ軍は、兵器糧食に乏しく、初、連戰利を失ひしが、ウォシントン堅忍にして敢へて屈せず、フランス・イスパニアの援助を得てより勢漸く振ひ、ヨークタウンに於て、イギリスの大軍を降すに及び、獨立の大勢定りぬ。是に於て列國皆、其の獨立を承認し、イギリスも亦、一、七八三年ベルサイユ和約によりて、其の獨立を承認し、所謂アメリカ合衆國起れり。

憲法制定（西紀一、七八七年）（松平定信老中となる年）

大統領

國會

ウォシントン

アメリカ合衆國の憲法　かくて北アメリカ合衆國は、新に憲法を制定し、共和政體を建て、任期四年の大統領をして行政權を總べしめ、州を代表する上院と、人民を代表する下院とを以て、國會を組織して立法權を司らしめぬ。一、七八九年、ウォシントン第一次の大統領に選ばれ、國力の增進を務めしかば、國運年と共に發達するに至れり。

第九章　十八世紀に於ける歐洲諸國の情勢

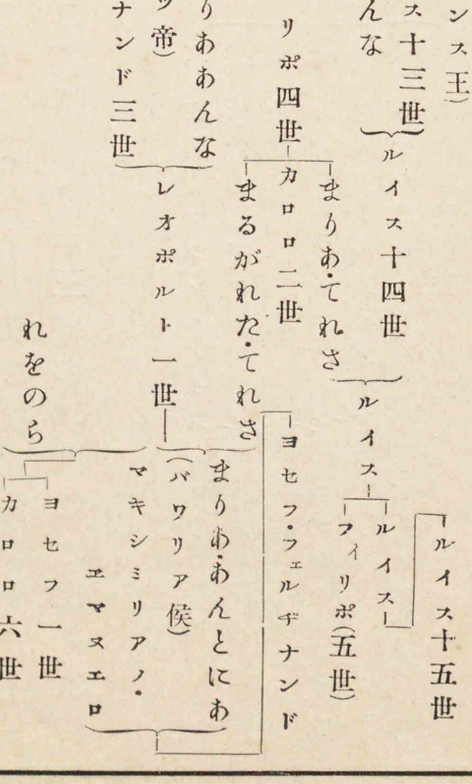
イスパニア繼承の役（西紀一、七〇一年―一、七一四年）（我が元祿時代）

イスパニア繼承の役　これより先、十八世紀の初、フランスは隆盛の極に達せし頃、ルイス十四世は、イスパニアの王位繼承に干渉し、ヨーロッパ諸國を騷動せしめたり。

原因

一、七〇〇年、イスパニア王カロロ二世歿して子なかりし

イスパニア王位繼承戰役關係系圖



かば、ルイス十四世は、孫フィリポをして其の後嗣たらしめたりしに、ドイツ帝レオポルド一世は、第二子カロロを

戰況

ユトレヒト和約（西紀一七一三年）

立てんとしてこれに反對し、イギリス・オランダと同盟して佛軍と戰ひ、フランスは一時大いに苦しみたり。然るにカロロ、ドイツの帝位に上るに及び局面一轉し、一七一三年ユトレヒトの和議成り、十三年の爭亂こゝに始めて收まれり。

ユトレヒト條約要項

一、列國はフランス・イスパニアの合併せざるを條件としてフィリポのイスパニア王位相續を承認す。

二、イギリスはイスパニアのジブラルタル、佛領のハドソン灣地方等を得たり。

三、サボヤはシチリアを得、又プロシアと共に王國の稱號を許されたり。

フランス衰亂の兆

フランスの衰運

フランスは宮廷の奢侈と、連年の戰役のために、財政困難となり、平民は重稅に困しみ飢寒に

泣きしが、貴族は免稅の特權を有して榮華を極め、風俗は益華美に流れて、社會の腐敗其の極に達し、「大洪水將に來らん」形勢となりぬ。

十八世紀前半の二強國勃興

ポーランドの分割

十八世紀の前半には、ロシアにペテロ大帝出で、プロシアにはフレデリキ大王起りて、兩國の勢威大いに振ひぬ。オーストリア帝マリア・テレサも、亦七年戰役の後は心を内治に注ぎ、富强の實頗る擧れり。十八世紀の後半に至り、女傑カタリナ二世、ロシア皇帝の位にあり。ペテロ大帝の遺志をつぎて、國勢の振興に勉めき。時にスラブ民族の建てたるポーランド王國は、貴族專横にして、國

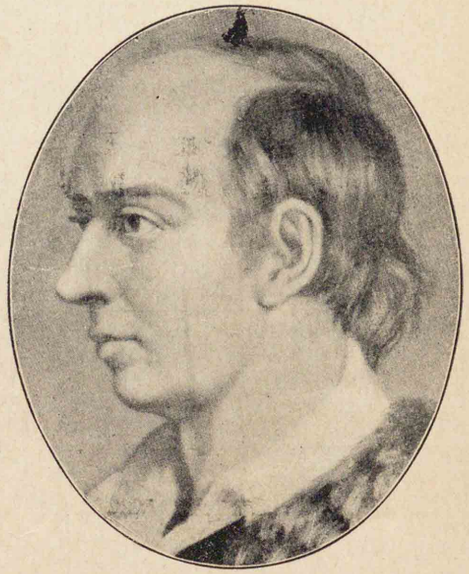
七年戰後のオーストリア露帝カタリナ二世

十八世紀のスラフの婦人の髮飾

ボルテールの像

ルソーの像

ゲーテの像



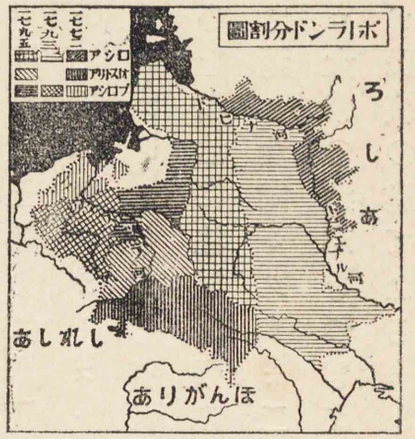
ゴールドスミスの像

ポーランド王國の衰運

ポーランドの分割

ポーランドの滅亡（西紀一、七九五年）（寛政六年）（清の高宗の末年）

文明の概觀



ポーランドを分割せしかば、一、七九五年に至りポーランド王國全く滅亡したり。

十八世の文明　此の世紀にはヨーロッパ諸國の王權内甚だ亂れたり。カタリナ二世はこれに乘じて、其の内政に干渉し、遂にプロシアのフレデリキ大王、オーストリアの女王マリアテレサと約して、三たび

カタリナ二世の像

科學・文學
ゴールドスミス（西紀一七二八年―一七七四年）
ゲーテ（西紀一七四九年―一八三二年）
シルレル（西紀一七五九年―一八〇五年）
モンテスキュー（西紀一六八九年―一七五五年）
ボルテール（西紀一六九四年―一七七八年）
ルソー（西紀一七一二年―一七七八年）

確立すると共に、新思想勃興して、中古以來の舊思想を脱し、舊制度を打破するに努めぬ。各種の科學は大に發達し、實業の進歩を促せり。文學も亦隆盛を極め、英國にゴールドスミス、ドイツにゲーテ・シルレル等の大文豪出でたり。フランスにはモンテスキュー・ボルテール・ルソーあり。巧妙なる文辭を以て、自由・平等の説を唱へしかば、其の革新思想はヨーロッパの社會人心を風靡するに至れり。

近古の概括

年代 近古期は十六世紀より十九世紀まで、約三〇〇年間に亙り、我が室町幕府の末より、江戸幕府の末頃まで

に當れり。

變遷　十六世紀の初に宗教改革唱へられてより、歐洲諸國は、新舊兩教徒の紛爭に陷りぬ。イスパニアは、其の富强を賴みて、舊教を擁護せしが、イギリスはこれを破りて、次第に海上の優者となり、オランダも亦、獨立したり。大陸にては、宗教の爭亂止まず、十七世紀の前半には所謂三十年戰役起りて、ドイツは大いに疲弊せり。フランスはこれに乘じて其の國勢を振ひ、十七世紀の後半には、全歐に於ける政治・學藝・風俗の中心となれり。十八世紀に入りて、ロシア・プロシアの二國新に勃興し、フランスは次第に衰亂の兆をあらはせり。

又、地理上の發見以來、ポルトガル・イスパニア・オランダ・イ

ギリス・フランスの諸國は、相つぎて盛に通商殖民を行ひ、殊にイギリスは、大陸に事あるごとに其の勢力を海外に伸張し、次第に海上の王となれり。要するに近古期には、現代の諸强國次第に勃興し、ヨーロッパ人の活動は歐洲以外に擴まるに至れり。

文化　文藝復古、地理上の發見以來、人智次第に發達し、十七世紀大亂の後、ヨーロッパ諸國の王權確立すると共に、文運更に振興せり。觀察實驗の研究法起りて、科學は大いに發達し、天文・博物・理化學上の發見發明相つぎて起り、哲學・文學も盛になり、殊にドイツの文學は、十八世紀に於て極盛に達せり。十七世紀後半、フランス王政の隆盛を極めたる時は、其の學藝は全歐を風靡し、十八世紀には

革新文學起り、舊來の思想制度を斥け、ヨーロッパ諸國の人心に大影響を與へたり。

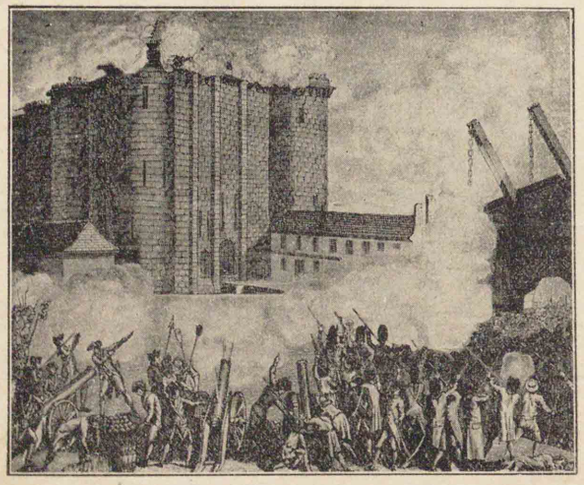
第四編　近世

第一章　フランス革命

革命の原因

遠因

前章に述べたるが如く、フランスの國庫窮乏し、政治紊亂し、社會の腐敗其の極に達したる時に當り、ルソー等は、自由平等の說を唱へて、政治・社會の革新を促せり。アメリカ合衆國の獨立成るに及び、佛國人は其の新制度を羨み、人心益動搖し



バスチーユ牢獄破壞の圖
（當時のコダンの銅版による）

近因

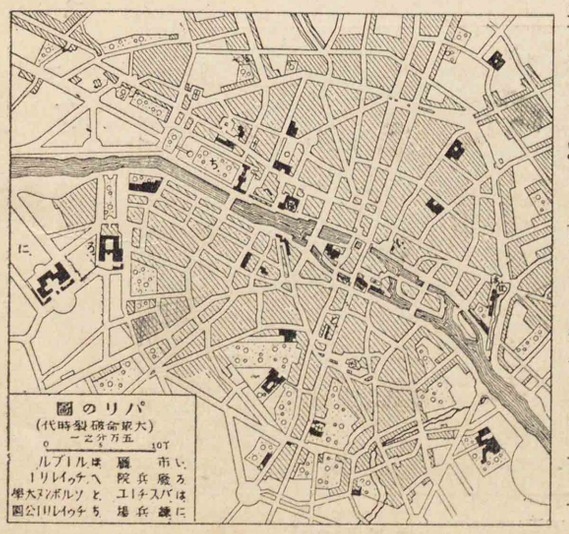
三部會の召集（西紀一、七八九年）（寛政元年）（清の高宗の世）

國民議會（西紀一、七八九年一、七九一年）

バスチーユの破壞（西紀一、七八九年）

革命の氣風日に盛んとなれり。

ルイス十六世立つに及び、財政整理の意ありしも、優柔にして決せず。遂に國民と共にこれを謀らんため、一、七八九年三部會を召集せしが、平民は貴族・僧侶と意見を異にし、遂に分離して國民議會を組織し、憲法の制定を企てたり。よりて王は武力を以て之を抑壓せんとするや、パリの暴民は蜂起して、バスチーユの牢獄を破壞せり。これ實に大



新憲法の制定（西紀一、七九〇年）

立法議會（西紀一、七九一年九二年）

外國の干渉

國民集會（西紀一、七九二年九五年）

亂の發端にして、暴動は忽ち各地に波及したり。

大革命の經過　國民議會は、立憲君主制の新憲法を作り、國王に迫りてこれを裁可せしめ、後、自ら解散せしが、新憲法によりて開かれたる立法議會にては、立憲王政黨・溫和共和黨・過激共和黨の三派相爭へり。時にプロシア・オーストリア兩國は、佛王を救はんとて、兵を發して佛國に迫りしかば、人心更に激昂し、國王を幽閉せり。已にして、立法議會解散して、國民集會之に代るに及び、過激黨益勢を振ひ、一、七

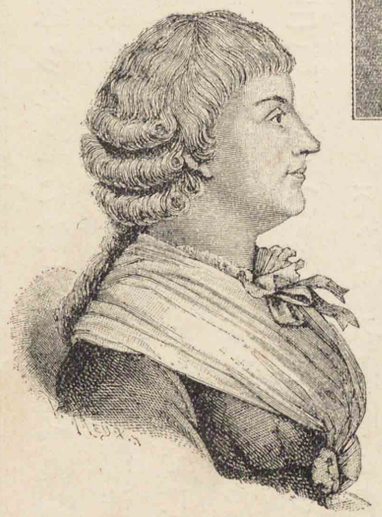
ロベスピエールの像
（グエランの筆によるる）

共和政體の設立（西紀一七九二年）

恐怖時代（西紀一七九三年―一七九四年）

ファーロット・コルデーの像

を退け、内は舊來の制度風習を改め、また恣に前王后以下多數の反對黨を殺戮し、有名なるローラン夫人をもまた斷頭



ローラン夫人（當時の肖像によるろ）

九二年王政を廢して共和政とし、翌年遂にルイス十六世を弑せり。かくて所謂恐怖の時代に入り、過激黨は全權を握り、外は列國の聯合軍

ロベスピエール殺さる（西紀一七九四年）

都督政府（西紀一七九五年―一七九九年）

ナポレオン（西紀一七六八年―一八二一年）（家治―家齊）（高宗―宣宗）

機下に倒せり。時にシャーロット・コルデーと稱する小女あり、身命を賭して佛國の禍根を除かんと欲し、暴虐の首魁たるマラーを刺殺せり。過激派も亦、分裂して互に相屠り、ダントン先づ倒れ、獨り暴威を振ひたるロベスピエールもまた、遂に國民集會の爲に囚へられ、斷頭臺上に殺されき。是に於て、國民集會は、一七九五年新に憲法を定め、五名の都督に行政を委ね、上下兩院に立法權を與へて、自ら解散し、悲慘なる革命ここに一段落を告げたり。

第二章　ナポレオン一世　上

ナポレオン一世の立身　一七六八年、コルシカ島に稀世の英雄ナポレオン・ボナパルト生れき。幼にして賢母

第一回列國聯合

に教養せられ、長じて軍學を修む。其の成績常に衆に秀で、砲兵士官として夙に頭角を露ししが、パリの王黨新憲法に反對して一揆を起すや、議會の命を奉じ、これを鎮定せり。

是より先、ルイス十六世弑害の報傳はるや、歐洲列國の帝王は、革命の氣勢を挫かんと欲し、聯合して兵をフランスの境上に進めしも、自由と祖國とのために奮鬪せるフランス軍に擊退せら

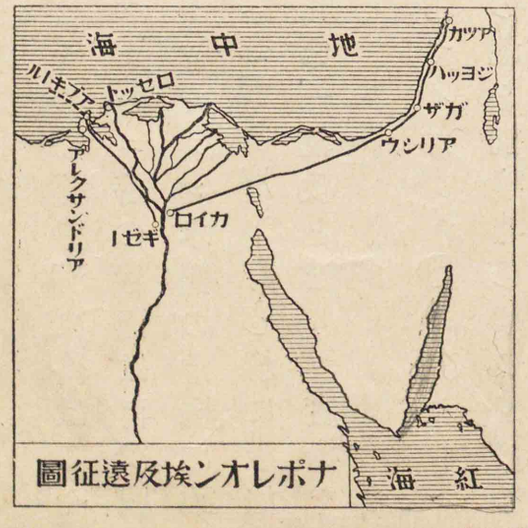
ナポレオン一世の像
（ラデロシウの筆によるる）

イタリア征伐（西紀一七九六年—一七九七年）

エジプト征伐（西紀一七九八年—九九年）

れ、イギリス・オーストリアの兩國のみなほ戰爭をつづけたり。よりて、ナポレオンは都督政府の命を奉じ、敵軍を擊破せんとし、兵を率ゐて、アルプの嶮を越え、北イタリアを略し、長驅して、オーストリアに侵入し、これに和を請はしめ、ベルギー等を得て、威名頓に揚れり。

ナポレオンはまたイギリスとインドとの連絡を絶たんと欲し、兵を率ゐてエジプトに侵入せしが、其の艦隊はニール河口に於て、ネルソンの



ナポレオン埃及遠征圖

率ゆる、イギリス艦隊に全滅せられたり。

第二回列國聯合（西紀一、七九九年）

ナポレオンの執政　ネルソンの勝報歐洲に傳はるや、イギリス・オーストリア・ロシア・トルコ等の諸國は再び同盟してフランスを攻めぬ。ナポレオン本國の危機に乘じて、急に國に歸り、武力を以て都督政府を仆し、新に憲法を定め、執政官三名を置き、自ら第一執政となりて、實權を掌握せり。

執政政府（西紀一、七九九年・一、八〇四年）

オーストリア征伐（西紀一、八〇〇年・一、八〇一年）

程なくナポレオンは、兵を率ゐてイタリアに向ひ、オーストリア軍を破り、ライン左岸の地を割讓せしめ、つぎてイギリスと和を結べり。かくしてナポレオンは、大いに力を内治に用ひ、財政を整へ、教育・實業を奬勵し、また有名なる法典を編成せり。是に於てナポレオンの威望内外に

輝き、遂に衆に推されて、終身執政となりしが、一、八〇四年に至り、皇帝の位に卽き、ナポレオン一世と稱せり。

ナポレオン皇帝となる（西紀一、八〇四年）（文化元年）（清の仁宗の世）（モゴル帝國英の保護となる）

ナポレオン一世の盛運　此の時イギリスは列國に勸め、第三回同盟を結びてフランスに抗せり。よりてナポレオンは、先づイギリスを伐たんとせしが、フランス・イスパニア聯合艦隊は、トラファルガルに於て、英將ネルソンに破られ、帝の企圖水泡に歸せり。されど陸戰にては到る處に勝を制し、アウステルリッツの野に墺・露の大軍を破り、つぎて西南ドイツの十六州、ライン聯邦を組織するに及び、其の保護者に仰がれき。またプロシアに侵入して、普・露の聯合軍を擊破し、プロシアをして、其の領土の半を割かしめたり。

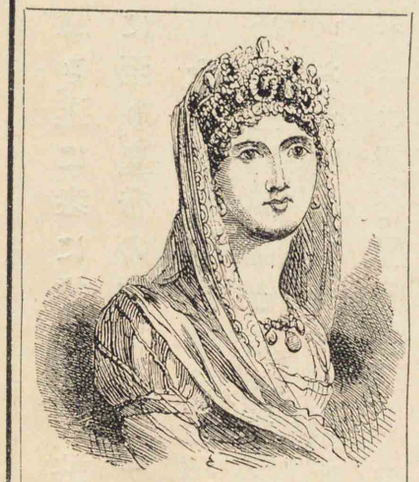
第三回列國連合（西紀一、八〇五年）

トラファルガル海戰（西紀一、八〇五年）

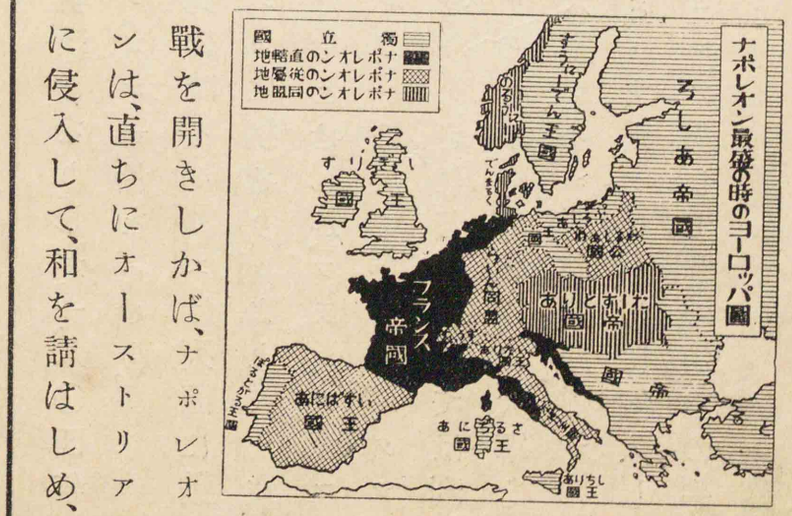
ナポレオンの連捷

イスパニア征討（西紀一八〇八年）
オーストリア征討（西紀一八〇八年）
ナポレオンの全盛

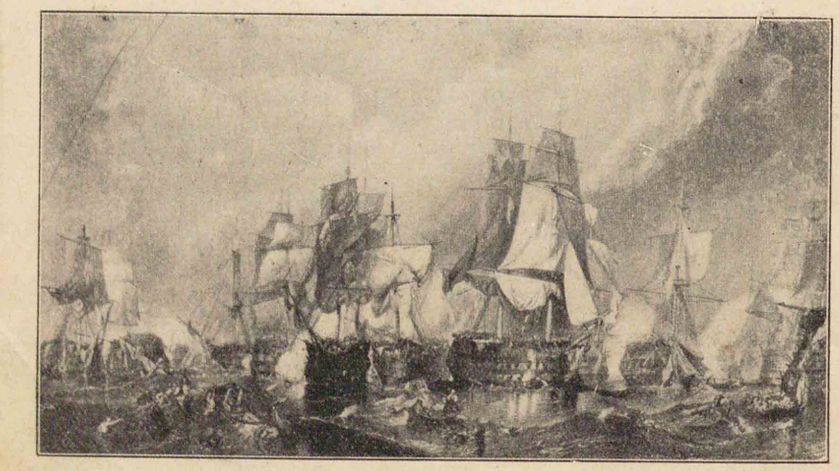
已にして、ナポレオンは將を遣はして、ポルトガルを討ち、次いでイスパニアを併せぬ。然るに、イスパニアは、イギリスの援を得て兵を擧げ、オーストリアもこれに乘じまた戰を開きしかば、ナポレオンは、直ちにオーストリアに侵入して、和を請はしめ、



ヨセフィナの像



ネルソンの像（アポットの筆による）



トラファルガル海戰の圖

ナポレオンの帝國の弱點

大陸封鎖令（西紀一八〇六年）

遂に皇后ヨセフィナを離別し、オーストリア帝の皇女マリア・ルイザを娶りぬ、當時ナポレオンの勢威は全盛を極め、全歐の大半は其の指揮を奉ずるに至れり。

第三章　ナポレオン一世　下

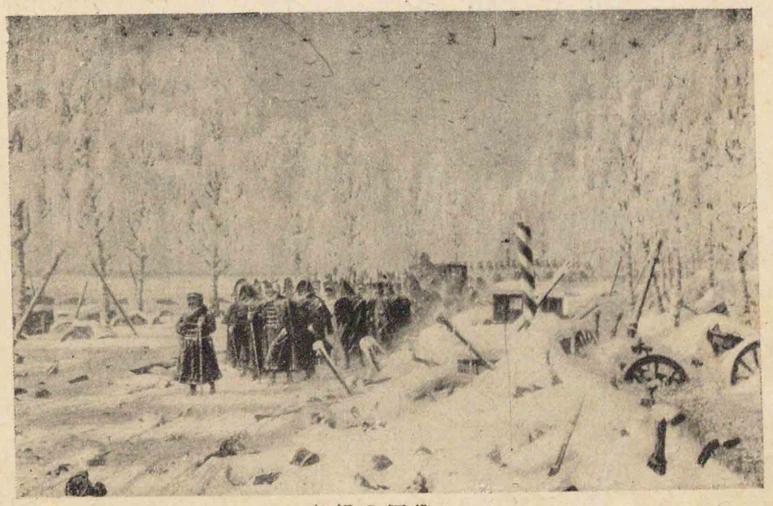
ナポレオン一世の衰運　ナポレオンの勢威は、かく盛大を極めたれども、國内は多年の戰役によりて疲弊し、またフランスに屈服したる諸國も、獨立を圖らんとせり。加ふるにナポレオンは、經濟上より英國を苦しめんと欲し、大陸封鎖令を發して、歐洲大陸諸國が英國と通商するを禁じたれば、列國は商業衰へて不平甚だしかりき。ロシアは、大陸封鎖の命を奉ぜざりしかば、一八一二年、ナ

ナポレオンのロシア征伐（西紀一八一二年）

ポレオンは五十萬の大軍を率ゐて、露國に侵入し、モスクバに進めり。會〻大火起りて、全都灰燼に歸し、佛軍は飢寒に苦しみ、退軍せしに、コサック兵の追擊を被りて大敗し、ナポレオンも僅に身を以て逃るるを得たり。

獨立戰役

ここに於て、ヨーロッパ列國は、フランスに報ゆる機を得て、英・露・普・墺の聯合軍は、ライプチヒに佛軍を破り、進みてパリを陷れナポレオンを廢してエルバ島に流し、ルイス十六世



佛軍の退却

ライプチヒの戰（西紀一八一三年）

エルバ島配流

ルイス十八世（紀西一八一四年—一八二四年）

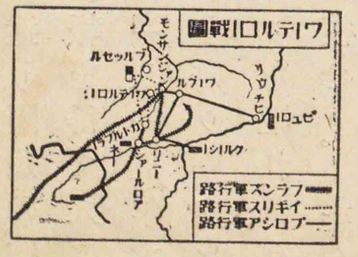
ウィーン列國會議（西紀一八一四年—一八一五年）

ナポレオンの歸國

ウエリントンの像
（ローレンス筆肖像によるる）

の弟ルイス十八世を立ててフランス王となせり。

ナポレオンの再擧　かくて各國は、ウィーンに會して、善後策を講ぜしが、議未



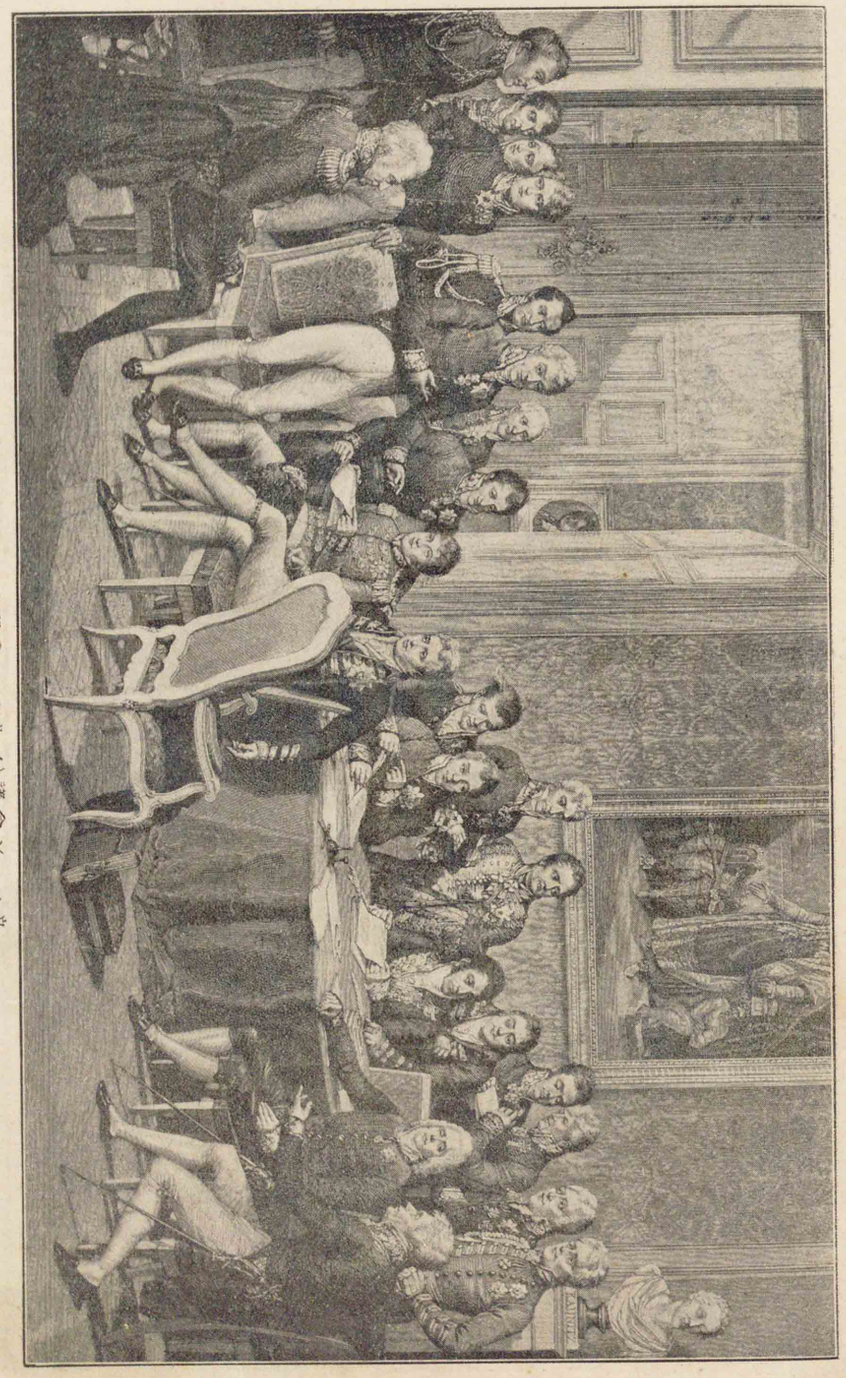
ワーテルローの戰（紀西一八一五年）（文化二年）

ナポレオンのセント・ヘレナ配流

ウィーン會議の決定要項

だ決せざるに際し、ナポレオン密に佛國に還り、國民の歡迎を承けて、再び帝位に登れり。列國此の報を得て大に驚き、急に聯合軍を起して佛國を伐てり。一、八一五年六月、兩軍ベルギーのワーテルローに會戰し、英將ウェリントン奮戰して大勝を得、聯合軍は進みてパリを陷れ、再びナポレオンを斥けて、ルイス十八世を位に復せり。かくてナポレオンは、太西洋の一孤島セント・ヘレナに流されしが、後、病にかかり、一、八二一年、絶世の英雄も終に淋しき最後を遂げぬ。

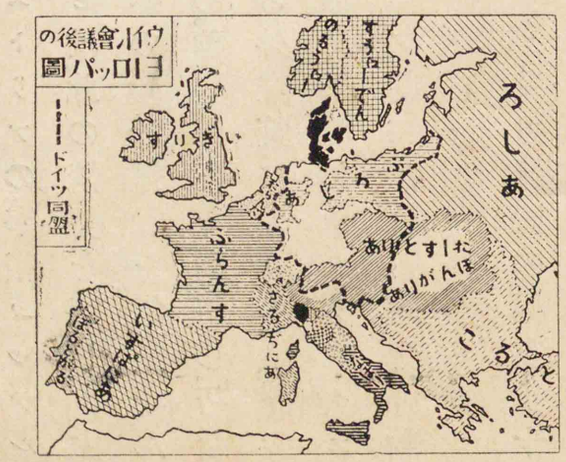
ウィーン會議　ウィーンの列國會議は、一、八一五年六月全く終結し、(一)フランスは革命前の境域に歸り、(二)普・墺の兩國は其の舊領を復し、(三)ドイツの三十九州は新にド



ウィーンに置のーベサイ)議會ソーイヴ

神聖同盟（西紀一八一五年）

イツ聯邦を組織し、(四)ロシアはポーランドを領し、(五)イギリスは殖民地を増加し、(六)スウィスは永久中立國となり、(七)スウェーデンはノルウェーを併せ、(八)オランダ、ベルギーは合して一王國となれり。



第四章　亞米利加諸國及び希臘の獨立

ヨーロッパ大亂後の國情　ウィーン會議の後、ロシア帝アレクサンデル一世は、オーストリア帝及びプロシア

王と共に、神聖同盟を結び、キリスト教の主旨に從ひ、世界の平和を圖らんと唱道し、列國の君主概ねこれに加れり。當時、歐洲は大亂の後とて、諸國民は專ら平和を希ひ、政府もまた革命を恐れたり。

メッテルニヒの政策

オーストリアの宰相メッテルニヒは、此の情勢を察し、自由主義の政治運動を鎭壓せんため、神聖同盟を利用し、巧妙なる外交策によりて、諸國の政治に干渉し、イタリア・イスパニア等に起れる革命運動を抑壓したり。

メッテルニヒの像

革命運動の抑壓

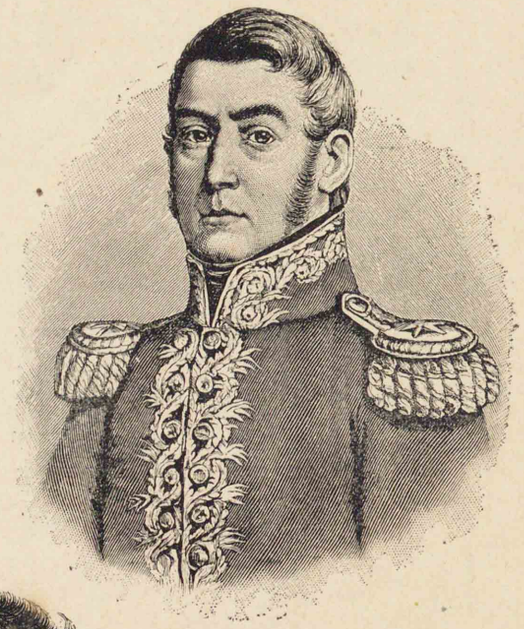
アメリカ諸國の獨立　十

獨立の原因

六世紀の初、ポルトガル及びイスパニアの兩國は、南・北アメリカ洲に廣大なる殖民地を拓き、本國の利益のみ圖りて、其の殖民地の發達を顧みざりしかば、殖民地の不平甚だしかりき。ナポレオン時代に至り、一時獨立の姿となりしが、歐洲の平和克復して、本國の干渉加はらんとするに及び、遂に叛旗を擧げたり。

イスパニア諸殖民地の獨立

一、八一八年、チレはイスパニアより獨立し、つぎてコロンビア聯邦組織せられ、ペルー・メキシコ等もまた獨立し、ブラジルも亦、一、八二五



サンマルチンの像
（南米獨立軍の英雄）

シモンボリバルの像
（南米獨立軍の英雄）

ブラジルの獨立（西紀一八二五年）（文政八年）

（清の宜宗の世）

イギリス及び北米合衆國の政策

ギリシアの擧兵（西紀一八二一年）

露英佛三國の干渉

年、ポルトガルより獨立して、共和國を建てたり。

神聖同盟は、此等新大陸諸國の獨立運動をも抑壓せんとせしに、英國は之に反對して、其の獨立を承認し、北米合衆國も、ヨーロッパ諸國が新世界の事に干渉するを斥けしかば、此等のアメリカ諸國は、皆、其の獨立を全うしたり。

ギリシアの獨立　此の頃ギリシア人も、人種・宗教を異にせるトルコの壓制を脱せんとて、獨立軍を起せり。ヨーロッパ諸國民は、これに同情を表し、來援するもの多かりしも、トルコ軍は、ギリシア軍を擊ちて、殆どこれを平げんとせり。然るに、露帝ニコラ一世は、トルコの勢威を弱めんと欲し、メッテルニヒの抗議をも顧みず、イギリス及フランスと結びて、ギリシアを援け、海陸よりトルコを攻

和議成る（西紀一八二九年）（松平定信卒す）

七月革命

原因

市民の蜂起（西紀一八三〇年）（天保元年）（清の宣宗の世）

め破れり。かくてトルコは遂に屈し、一八二九年講和成り、トルコはギリシアの獨立を承認し、露國に黑海・地中海間の通行權、及びモラヴィア・ワラキアの保護權を與へぬ。されば神聖同盟も全くここに敗れたり。

第五章　ナポレオン三世

フランスの政變　フランス王ルイス十八世の後には、極端の保守主義なる王弟カロロ十世卽位せり。王は未だ召集せざる議會を解散し、又、言論・出版の自由を禁ぜしかば、一八三〇年七月、パリの市民遂に蜂起して政府を覆し、王家の支族ルイス・フィリポを迎へて王とせり。これを七月革命といふ。

七月革命の影響

ベルギーの獨立（西紀一八三一年）

二月革命原因

共和政の建設（西紀一八四八年）（嘉永元年）（清の宣宗の世）

ルイス・フィリポの像

七月革命の影響として、自由獨立の運動は歐洲諸國に起れり。中にもベルギーとオランダとは、言語・宗教・風習を異にせしかば、ベルギーは遂にオランダ政府の壓制に抗して兵を擧げ、遂に獨立して立憲王國を建てたり。

さてルイス・フィリポの位に卽くや、內治・外交をあやまり、人民の自由を束縛するに至りしかば、一、八四八年二月、パリの市民復暴動を起し、王政を廢して、共和政を宣言せり、これを二月革命といふ。

フランス・ブルボン家

ルイス・ナポレオン大統領となる

フランス第二帝政

ルイス十三世
- ルイス十四世…ルイス十五世—ルイス
  - ルイス十六世
  - ルイス十八世
  - カロロ十世
- フィリポ（オルレアン公）……ルイス・フィリポ

ナポレオン三世 既にして新憲法なるや、ナポレオン一世の甥ルイス・ナポレオンは、選まれて任期四年の大統領となり、つとめて民望を收め、密に帝政の復興を謀りしが、議會の反抗するに及び兵力を用ひて反對黨を抑へ、一、八五二年國

ルイス・ナポレオンの像

ルイス・ナポレオン皇帝となる（西紀一八五二年）（嘉永五年）

クリム戰役（西紀一八五四年―一八五六年）（家定の世）

原因

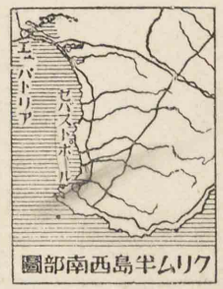
セバストポルの攻圍

民大多數の投票によりて皇帝の位に登り、ナポレオン三世と稱せり。

クリム戰役

此の頃ロシアはトルコの衰弊を見て、侵略の志あり。ローマ舊教徒とギリシア正教徒とが、聖地保管の權を爭ふに乘じ、遂にトルコと戰を開けり。

かねて國威の發揚を熱望せるナポレオン三世は、イギリスと力を合せてトルコを援け、其の聯合軍は、一八五四年クリムに上陸し、セバストポルの要塞を圍み、苦戰すること一年にして、これを陷落せり。ロシア遂に屈し、パリの條約にて、トルコ



クリム半島西南部圖

に對する要求を捨て、黑海を開放することを約せり。

クリム役には、兵士の死傷多く、加ふるに疾病流行して慘狀を極めたり。英國の貴女フロレンス・ナイチンゲールはこれを聞きて大いに心を動かし、自ら三十餘名の貴婦人を率ゐて戰地に向ひ、非常の同情と勇氣とを以て救護の務を完うしたり。これ

ナイチンゲールの像

セバストポル攻擊の圖
（一八五五年イラストレチドの畫報によるる）

を端緒として後に赤十字事業起れり。

ナポレオン三世の晩年　かくてナポレオン三世の威望大いに揚り、つぎてオーストリアとサルヂニアと戰ふに及び、帝はサルヂニアを助けてオーストリア軍を破り、威名益〻振ひ、一時歐洲の覇權を執れり。然るに帝は更に勢力をアメリカに得んと欲し、メキシコの内政に干渉して失敗せしより、漸く勢威を失ひ、更にプロシアと戰ふに及び大いに敗れ、遂に帝位を廢せられたり。

サルヂニアの援助

メキシコに於ける失敗

普佛戰爭

第六章　イタリアの統一

イタリアの國情

サルヂニア國の振起　イタリアは、中古以來小邦分立して統一なく、一八一五年ウィーン會議の後も、なほ數多

第十表

年	日本史	國	其他
1800			西紀
1805			ルートラルガフ海戰
1810	大日本史の獻上		
1813			ヨーロッパ獨立戰役
1815			ウィーン列國會議
1815			ナポレオン侵入
1815			ワテルローの戰
1815			ナポレオン皇帝となる
1829			ギリシア獨立
1830			七月革命
1837	大鹽平八郎の亂		
1840		阿片戰役	
1848			二月革命
1850	長髮賊起る		
1853	ペルリ浦賀に來る		
1854			クリミア英起る
1861			イタリア王國建設
1861			南北戰役
1864	長髮賊平ぐ		
1866			普墺戰役
1868	王政維新		
1870			普佛戰役
1877	西南戰役		
1878			ベルリン條約
1884	日清の天津條約		
1885			マダガスカル島を保護領とす
1894	日清戰役起る		
1894			ニコラ二世卽位
1897			膠州灣租借
1898			米西戰爭
1899			トランスバール戰役起る
1900		北清事變	
1900			
1858			インド併有
1871			パリ開城
1885			バルマ併有併
1890			
1860			
1850			
1840			
1830			
1820			
1810			
1880			
1870			

國	其他
日本	
清	
清	
清

サルヂニア國の振起

エマヌエロ二世

カブール統一事業の基礎

パリ講和（西紀一八五六年）

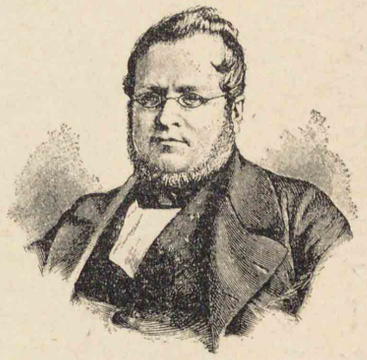
の小邦に分裂し、其の多くはオーストリアの壓制を受けたり。よりて北イタリアなるサルヂニアは、これに抗してイタリア統一につとめぬ。英明なるエマヌエロ二世立つに及び、父王の志をつぎて統一の大業を遂げんとし、立憲政治を行ひて國力を養ひ、賢相カブールまたこれを輔けたり。

ビクトリオ.エマヌエロの像

クリム戰役起るや、サルヂニアも亦、兵を出して、英・佛聯合軍を助け、次ぎてパリの講和會議には、カブール親らこれに臨み、頻りにオーストリ

墺・伊戰役（西紀一八五九年—六〇年）（家茂の時）（清の文宗の世英佛侵入の頃）

結果



カブールの像

アの横暴を訴へて、英・佛の同情を動かし、遂にイタリア統一の基を開けり。

墺・伊戰役　サルヂニアは、フランス帝ナポレオン三世と結び、オーストリアを激し、一八五九年、遂に戰端を開けり。兩國の聯合軍は、オーストリア軍を破りしが、ナポレオンはプロシアのオーストリアを助けんことを慮り、急にオーストリア帝と和し、サルヂニアにはロンバルヂアを與へ、トスカナ以下諸小國を其の舊主に還すことを約せり。

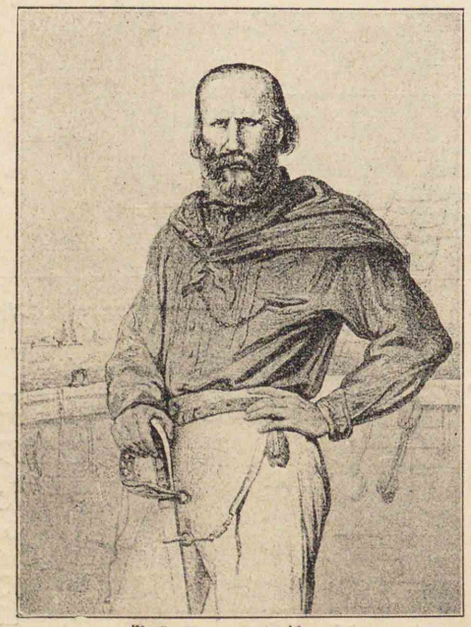
イタリア王國の統一　然るにイタリアの諸小國は、こ

カリバルヂ

イタリア王國の建設（西紀一八六一年）（文久元年）（清の文宗英佛と和する年）

れに從ふを欲せざりしかば、エマヌエロはナポレオンの同意を得て、此等の地を併せ、つぎて兵を南方に進めき。此の際志士ガリバルヂは義勇兵を率ゐ、シチリア・ナポリを平げてこれをサルヂニア王に獻ぜり。かくてイタリア王國統一の業略成りしかば、エマヌエロは、一八六一年イタリア王の位に卽けり。

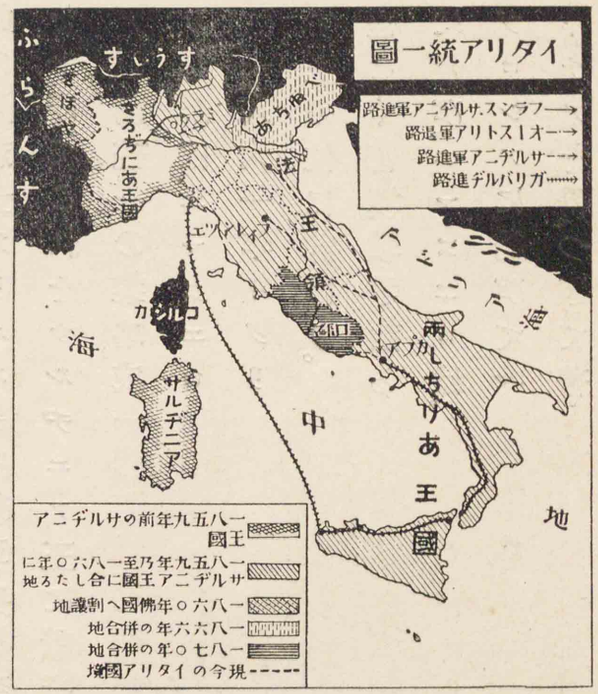
程なく普・墺戰爭起るに及び、エマヌエロは、プロシアに結びてベネチアを得、つぎて普・



ガリバルヂの像

統一の完成（西紀一八七一年）（明治四年廢藩置縣の年）（清の穆宗の世露兵イリ占領の年）

ドイツの國情



第七章　ドイツの統一

プロシアの強盛

ウィーン會議の後、ドイツの諸邦は佛戰爭のために、フランスがローマの兵備を撤するに乘じてこれを占領し、一八七一年、都をここに遷し、イタリア統一の大業を全うせり。

プロシアの振興

ウィルレム一世（西紀一八六一年—一八八八年）（文久元年—明治二一年）

ドイツ聯邦を結び、オーストリア及びプロシアは國勢最も盛にして、互に覇權を爭へり。されば、ドイツ國民の熱望せる、國家の統一も久しく成らざりき。

これより先、プロシアは、ナポレオン一世に破られしより、專ら國力の恢復に力め、北ドイツ諸國を連合して、關稅同盟を結び、又、國民教育を盛にし、國民皆兵主義を施行せしかば、其の勢威日に盛なり。ウィルレム一世立つに及び、

プロシア（ドイツ）ホーヘンツォルレルン家

フレデリキ
ウィルレム一世
- フレデリキ二世
- □—フレデリキ・ウィルレム二世
  - フレデリキ・ウィルレム四世
  - ウィルレム三世
    - フレデリキ
    - ウィルレム一世—フレデリキ三世—ウィルレム二世

モルトケの像

ビスマルクの像
（寫眞によるの）

ドイツの問題は一八四八年及び九年の時の如く演説及び多數決にて定まるものにあらずこれを決するはただ鐵と血とに賴るのみあるのである（ビスマルク）

ビスマルク
モルトケ

原因

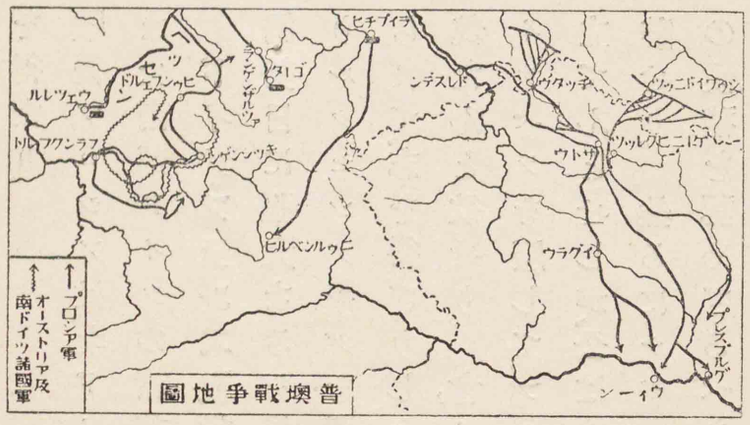
ウイルレムー世の像
（寫眞によるの）

ドイツ諸邦を統一し、プロシアをして其の盟主たらしめんとの志あり。ビスマルクを首相に、モルトケを參謀長に任用し、大いに軍備を擴張して、密に其の機の到るを待てり。

普・墺戰爭　當時デンマルクに屬せる、シュレスウイヒ及びホルスタインの二州は、ドイツ聯邦に加はらんと欲して獨立を圖り、ドイツ聯邦に救を求めたり。よりてプロシア・オーストリアの兩國は、連合してデンマルクを破

戰況（西紀一八六六年）（長州再征の年）

結果



普墺戰爭地圖

り、此等の地方を略せしが、其の後、此の領地の處分に關して紛爭を生じ、遂に普・墺兩國は戰を交ふるに至れり。

一、八六六年、プロシアの精鋭なる軍隊はオーストリアに侵入し、ウィーンに迫れり。墺國は遂に力の及ばざるを悟りて、和を講じ、(一)オーストリアはドイツ聯邦を離れ、(二)プロシアはシュレスウィヒ・ホルスタインを合せ、(三)プロシアを助けたるイタリアはベネチア

戰後のプロシア

を得たり。

戰後プロシアは、北ドイツ聯邦を作りて、其の盟主となり、また南部ドイツの諸邦と、攻守同盟を結び、國勢益盛なり。

ドイツ・フランス戰役（西紀一八七〇年―一八七一年）（明治三―四）

ドイツ・フランス戰役　ナポレオン三世は、プロシアの國勢日に強大なるを見て、心平ならず。またオランダよりルクセンブルグを買收せんとせしも、プロシアに妨げられて、志を得ざりしかば、深く之を含み、機を見てこれを伐たんと欲せり。會イスパニアに内亂起り、國人は女王イサベラを廢して、プロシアの王族レオポルド公を迎へ立てんとせしが、公はナポレオンの抗議に會ひて、これを辭せり。然るにナポレオンは、更にプロシア王に迫り、この候補を認めざるべき誓言を得んとせしが、王は斷然こ

戰況

講和

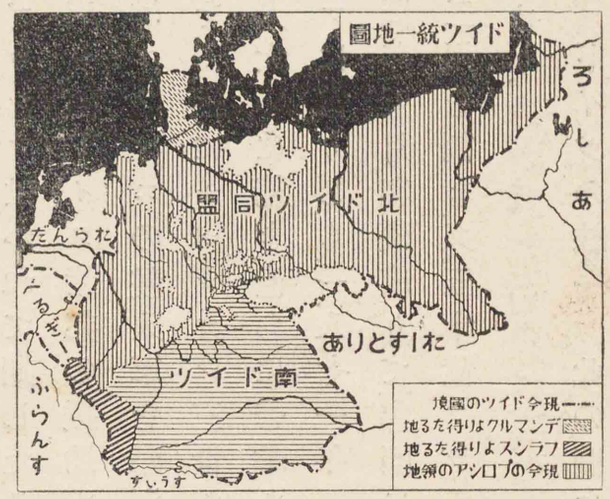
れを拒めり。ここに於いて兩國の平和破れ、一八七〇年、ナポレオンは、まづ開戰を宣告せり。

プロシアはかねて期したることなれば、動員立どころに成り、南ドイツ諸邦の援助を得、敵愾心燃ゆるが如き大軍は、フランスの侵入軍を擊退して、佛國に攻め入り、數大勝を得、遂にナポレオン三世をセダンに降せり。フランス人大いに驚き、直ちに帝政を廢して共和政を立て、プロシアに當りしも、一八七一年一月、パリ遂に陷れり。かくて同年五月和議成りて、佛國はエルサス・ロートリンゲンの二州を割き、又、五十億フランの償金を拂ふべきことを約せり。

ドイツの統一　此の間にドイツ統一の議漸く熟し、パ

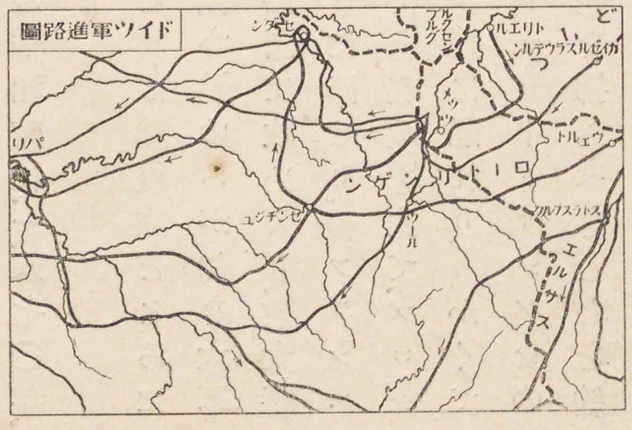
ドイツ皇帝ウィルヘルム一世

プロシア王ドイツ皇帝となる（西紀一八七一年）



より推されて、ドイツ皇帝の位に上れり。

プロシア王ウィルヘルム一世は、ベルサイユ宮殿に於て、ドイツ諸邦の君主


ドイツ軍進路圖
ベルリン
ドレスデン
ライプチヒ
ニュルンベルク
ミュンヒン
ストラスブルク
ストラスブルク
ミュルハウス
ストラスブルク
ストラスブルク
ストラスブルク

第八章　アメリカ合衆國の發達及び南北戰役

アメリカ合衆國の發展　アメリカ合衆國は、獨立後、有爲の大統領相つぎて力を民政に用ひ、國運次第に進み、且、購入・獲得等によりて、其の版圖大いに廣まり、遂にメキシコ灣及び太平洋岸に達せり。また通商も著しく發達し、國勢益〻富强に向へり。かくて一、八五三年に及び、大統領フィルモアは、水師提督ペルリを我が國に送りて和親を求めしめ、程なく總領事ハリスを派して、通商條約を結ばしめたり。

合衆國の富榮
版圖の擴張
日米の通商
ペルリの來朝
（西紀一、八五三年）
（嘉永六年）

アメリカ合衆國大統領略表

戰爭の遠因

リンカーンの大統領當選（西紀一八六〇年）

（萬延元年）（英佛軍北京を陷るの年）

南北開戰（西紀一八六一年）（文久元年）

戰況

グラント

リチモンド陷落（一八六五年）（慶應元年）

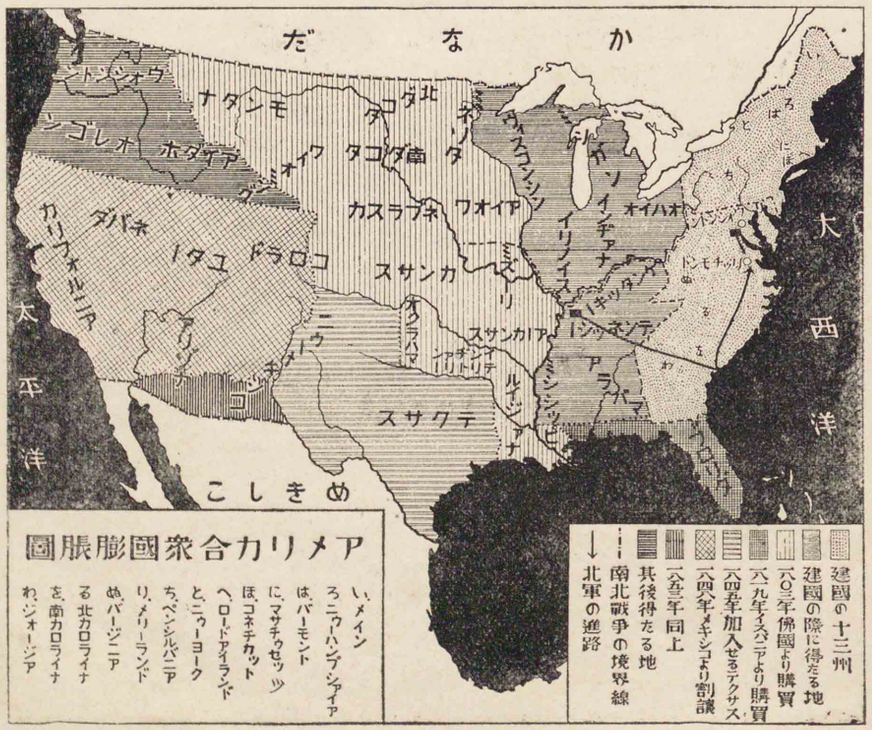
ワシントン……モンロー……フィルモア……リンカーン

南北戰爭　アメリカ合衆國の南部諸州は、氣候溫暖土地肥沃なれば、盛んに黑奴を使役して穀類・綿を耕作せしが、北部諸州は製造・貿易を勉め、奴隷の使役を以て、人道に悖るものなりとして、常にこれを攻擊せり。一八六〇年、奴隷廢止黨の首領アブラハム・リンカーン、選ばれて大統領となるに及び、南部十一州は北部より分離し、アメリカ聯邦を組織し、ジェッファーソン・デービスを擧げて大統領となし、翌年遂に北部諸州と戰を開けり。

開戰の初、南軍の勢、盛なりしが、後、形勢一變し、北軍の名將グラント頻りに南軍を破り、遂に南部の首府リチモンドを陷れたり。

リンカーンの像（寫眞による）

グラント將軍の像



戰後の合衆國

是に於て五年間の戰亂收まり、奴隷の使役は全く廢止せられ、南部諸州はまた合衆國に合し、漸次戰役前の繁榮を回復するに至れり。

ロシアの國情

トルコの衰勢

屬州の叛亂（西紀一八七五年―七六年）（明治八―九年）

列國の干渉

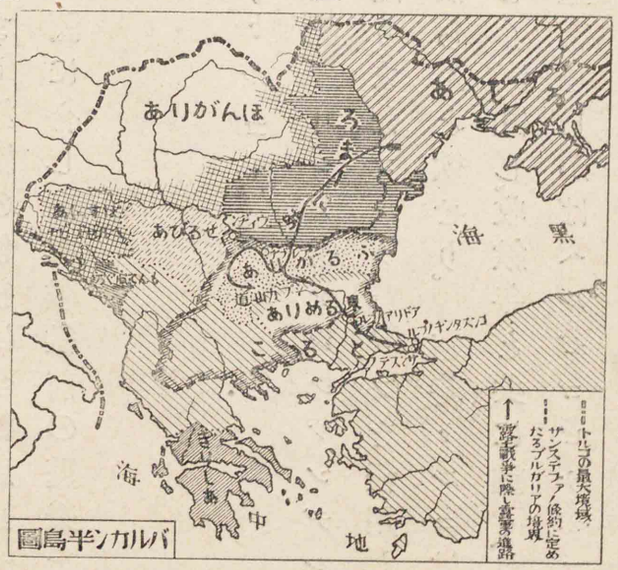
第九章　ロシア・トルコ戰役

ロシア・トルコ戰役の起因　ロシア帝アレクサンデル二世卽位の後、鋭意治を圖り、またゴルチャコフを任用し、國勢をバルカン半島に張らんと欲せり。當時トルコは國勢次第に衰へ、財政甚しく紊亂し、收斂年と共に重く、且、國內のキリスト敎徒を迫害せしかば、ヘルゼゴビナ・ボスニアの二州先づ叛旗を擧げ、つぎてセルビア・モンテネグロもこれに應じ、勢甚だ猖獗なりき。歐洲の列國は、トル

ロシア・トルコ戰役（西紀一八七七年—一八七八年）（明治一〇—一一年）

コに内政の改革を迫りしも、效なかりしかば、ロシアは此の機に乘じて、キリスト教徒保護を名とし、一、八七七年、トルコに向つて開戰せり。

戰況　露國の大軍はドナウ河を越え、オスマン・パシアの固守せるプレブナ城を圍みて、これを陷れ、長驅してコンスタンチノプルに迫らんとせり。トルコ大いに恐れて、イギリスの援助を求めしかば、ロシアはイギリスの干渉を喜


ありがんほ
ろま
あ
あびるせ
ぶるがり
黑
海
ありめる
ぶ
ぶ
ぶ

ゴルチャコフの像

オスマンパシャの像

サンステフアノの條約（西紀一八七八年）

ベルリン會議（西紀一八七八年）

ばず、急にトルコとサンステフアノの條約を結べり。

ベルリン會議　イギリスは、オーストリアと共にロシアの要求する所過大なりとして、露土間の條約に反對を唱へ、一八七八年六月、ベルリンに列國會議を開き、サンステフアノの條約に訂正を加へ、トルコと列國との關係を定め、ロシアは僅にアジアトルコの一部を得るに過ぎざりき。

ベルリン會議の決議

ベルリン會議決議要項

一、セルビア、ロマニア及びモンテネグロの獨立を承認す。

二、ブルガリアは半獨立國となりしも、其の領地は縮小せられ、南部に東ルーメリアの自治州を置く。

三、トルコ及びバルカン半島諸國は、信教の自由を公認す。

四、露國はカルス外、數地を得、英國はキプロス島を取り、墺國はヘルツゴ

露國皇帝ニコラニ世の像

チエールの像
（寫眞によろ）

ビナ、ボスニアの守備及び行政を委託せられたり。

第十章　歐洲諸國の形勢

三國同盟と二國同盟　ドイツは統一後、ビスマルク國政に當り、國運益〻隆盛に向へり。されどフランスの報復に備へんがために、ウィルレム一世は、ビスマルクの説に從ひ、オーストリア、イタリアと所謂三國同盟を結べり。一、八八八年、ドイツには、現皇帝ウィルレム二世位に卽き、鋭意國勢の

ドイツの國情

三國同盟（西紀一、八八三年）（明治一六年）

ウイルレムニ世の像

フランスの國情

二國同盟（西紀一八九一年）

ロシアの國情

アレクサンデル二世の變死（西紀一八八一年）

憲法の發布（明治一四年）（西紀一九〇五年）

振興を圖り、今や海軍の强盛、商工業の發展驚くべきものあり。フランスにては、チエール普佛戰後の經營に任じ、漸次戰前の國力を恢復せり。また三國同盟に對抗せんためロシアと連合せり。

ロシアは露土戰役後、國民の不平を增し、アレクサンデル二世は、晩年專制の結果、虛無黨に暗殺せられ、ニコラ二世は、極東經營のため日本と戰ひて大敗し、國內に紛擾起りしかば、遂に一九〇五年憲法を發布し、つぎて國會を召集するに至れり。

ロシアロマノフ家略系

パウロ一世
- アレクサンデル一世
- ニコラ一世—アレクサンデル二世
  - アレクサンデル三世—ニコラ二世（現皇帝）

ビクトリア女王の像

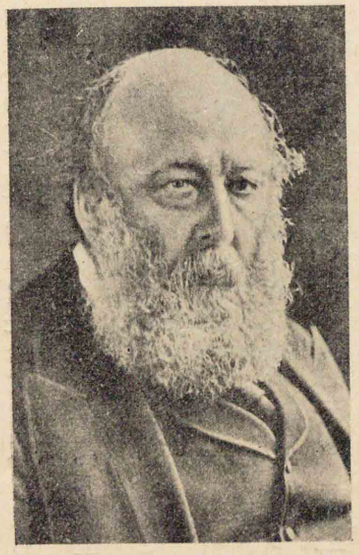
エドワルド七世の像

ジョルジ五世の像
（イギリスの現皇帝）

自由黨と保守黨

エドワルド七世の即位（西紀一九〇一年）（明治三四年）

グラッドストンの像



サリスベリの像

進せり。一、九〇一年ビクトリア女皇歿し、エドワルド七世立ち、國威益〻振ひ、其の領土は五大洲に跨り、海軍は精鋭強大

イギリスの隆盛　イギリスはベルリン會議の時、ロシアを抑へしが、其の後自由黨のグラッドストン、保守黨のサリスベリと交〻内閣を組織し、政治上の改革徐々に行はれて、國力益〻增

現今の隆盛

世界に比なく、航海通商は益盛大を極めたり。また日本と同盟して東洋の平和を圖り、更にフランス及びロシアと協商を結び、殆ど世界平和の中心たるべき位地を占めたり。一、九一〇年、エドワルド七世歿し、太子ジョルジ五世位を繼ぐ、これ卽ち現帝なり。

トルコ・ギリシア戰役（西紀一八九七年）

バルカンの形勢　ベルリン會議後、トルコにては國內紛擾絕えず、バルカン半島の諸國は、ロシアの威壓に苦しめり。一、八九六年、クレテ島のキリスト敎徒トルコに叛き、ギリシアに合併せんと圖りしより、ギリシア・トルコの戰爭となりしが、ギリシアは大敗し、地を割き、償金を出して、和を講ぜり。其の後トルコの志士は、青年トルコ黨を起して革新を唱へ、一、九〇八年遂に立憲制をたて、翌年皇

青年トルコ黨

帝を廢立せり。

第十一章　アジアに於ける歐洲諸國の經營

イギリスの印度經略

土人の叛亂（西紀一八五七年―一八五八年）（安政四―五年）

インド帝國建設（西紀一八七七年）（明治一〇年）

シンガポール購買（西紀一八二四年）

イギリス　クライブ、ヘースチングスのインド經營以來、英人は次第にインド全國の實權を握り、莫臥兒帝は英國の保護を仰ぐに至れり。後、土兵の叛亂起るに及び、英人は莫臥兒帝を廢しければ、アクバル大帝より殆ど三〇〇年にして莫臥兒帝國全く亡びぬ。英國政府は此の機に乘じ、東インド會社を廢して、印度を其の直轄とし、一八七七年、ビクトリア女王は、印度女帝の稱を兼ねたり。是より先、イギリスは、シンガポールを購ひ、マラッカを得

香港割取（西紀一八四二年）

緬甸併呑（西紀一八八五年）（明治一九年）

ロシアの南侵

ロシアの東侵

極東經營

て、通商の要地を占め、鴉片戰役後は、香港を取りて南清の商權を收め、一八八五年には、緬甸を滅ぼして印度の屬州となせり。其の後九年にして、マライ半島の諸小邦もまた英國の保護を仰ぐに至れり。

ロシア　既に東洋史に述べし如く、ロシアのアジア經略は、年と共に進み、一方には次第に中央アジアを攻略して、英領インドに迫り、アフガニスタンに於てイギリスと爭へり。また他方には、清國の北・西兩方面を侵して、イリを壓し、滿洲を蠶食せり。特に日清戰爭後は、極東經營に力を用ひ、遂に韓國をも壓迫するに至りしかば、我が日本は英國と同盟を結び、東洋平和のために露國と開戰するに至りぬ。戰後ロシアの極東經營は頓挫したりしも、未

日露及び英露協商

フランスの印度支那經略

清佛戰爭（西紀一八八四年—一八八五年）（明治一七—一八）

廣州灣の租借

だ世界强國たるの實を失はず。近時日本がロシアと協商を結ぶに及び、多年反目せる英・露間の協商亦、成立し、ペルシア、アフガニスタン、チベット等の問題も解決を見るに至れり。

フランス フランスは一、八五八年以來、インドシナの經略に勉め、コシェンシーヌ殖民地を起し、つぎてカンボヂア、安南を保護國とし、更に東京を侵略して、支那と衝突せしが、一、八八五年天津條約によりて、全く東京を占領するに至れり。また一、八九三年にはシャムを侵し、メコン河以東の地方を割取し、日清戰役後には、清國より廣州灣を租借し、其の勢威を南清に振へり。

エジプト經營

スエズ運河開通（西紀一八六九年）（明治二年）

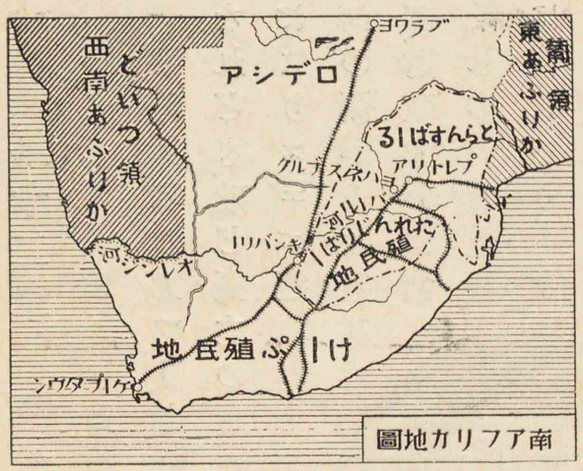
第十二章　アフリカ及び太平洋に於ける歐米列國の經營

イギリスのアフリカ經營 エジプトはトルコの屬邦なれども、殆ど獨立の實ありしが、佛人レセップスの設計によりスエズ運河の開かるに及び、財政大いに紊亂し多大の負債に苦しめり。イギリス政府は、これに乘じて、其の運河株券を購入

レセップスの像

イギリスの南アフリカ經營

せり。爾來英・佛の二國は共に債主として、エジプトの財政を管理し、其の内政にも干渉せしかば、國内に外國人排斥の運動起り、一、八八一年、武官アラビ・パシャ兵を擧げたり。イギリス獨り軍を出して、之を鎭定し、遂にエジプトを其の保護國となせり。



南アフリカ地圖

イギリスはまたウィーン會議の時、オランダよりケープ殖民地を得て、漸次に其の威を南アフリカに張りしが、其の北にはオランダ殖民の子孫の建てたるトランスバール（後に南アフリカ共和國と稱す）

トランスバール戰役（西紀一、八九九年―一、九〇二年）（明治三二年―三五年）

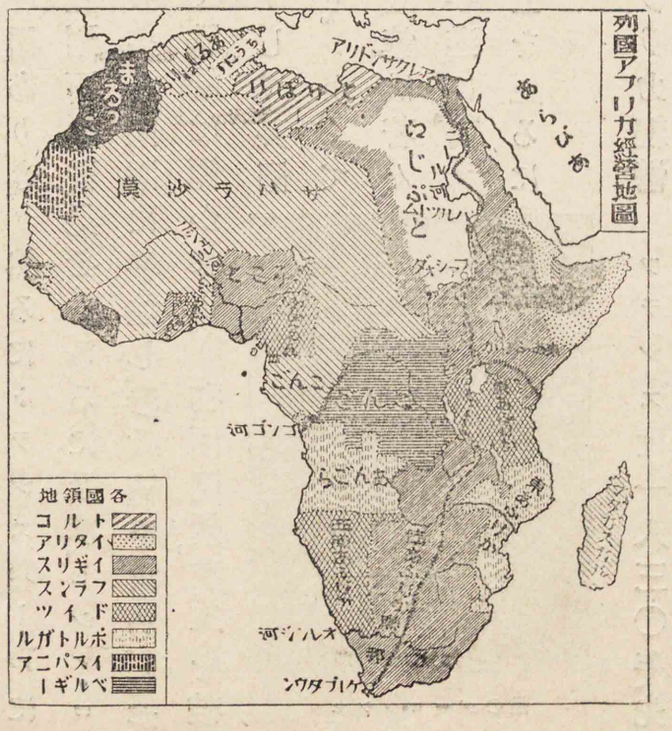
フランスのアフリカ經營

ランイエの兩共和國ありき。然るにトランスバールに金、オランイエに金剛石の發見せらるるに及び、セシル・ローズ其の他の英人多く兩國に移住し、參政權を求めしが、兩國は之を拒みて、戰端は開かれぬ。初、兩國屢英軍を破りしも、衆寡敵せずして、英國に征服せられたり。かくて英國の南亞統一政策は著々成功し、一、九一〇年遂に南アフリカ聯邦の成立を見るに至れり。

セシル・ローズの像

フランスのアフリカ經營　フランスは一八三〇年、先づ北岸のアルジェリアを取り、後更に其の隣邦チウニス

を保護國とし、つぎてサハラ沙漠及び其の南方一帶の地を占領し、またマダガスカルを屬邦となせり。一、八九八年、ファショダの要地を占領するに及び、英國の抗議に會ひて、之を放棄し、一、九〇四年の英・佛協商によりて、其の解決を見るに至



ドイツのアフリカ經營

れり。

ドイツのアフリカ經營　ドイツは一、八八四年以來、アフリカ經營に著手し、其の獲得にあらん限りの手を展ばし、次第にアフリカの東部、竝に西南部の一部等に我が勢力範圍を擴げしが、尚、それにも滿足すること能はずして、益〻其の勢力範圍の擴張に努め、一、九〇六年アルヘシラスに列國會議を開き、フランスの勢力がマロッコ國内に盛ならんとするを妨げしが、三年の後、兩國の協商成れり。

ジエームスクツクの像

太平洋に於ける英國の經營

カナダの横貫鐵道竣工（西紀一八九一年）

太平洋に於けるドイツの經營

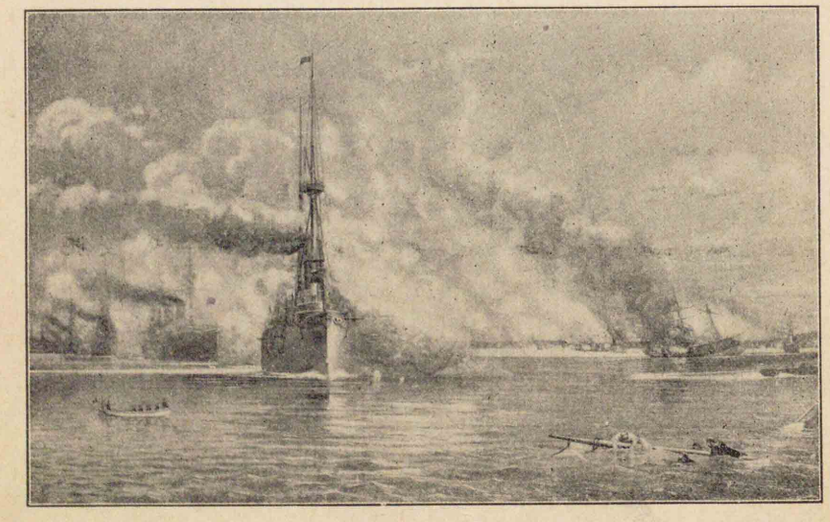
太平洋に於ける英國の經營　イギリスは、十八世紀後半にジェームス・クックの探檢に基きて、オーストラリア及びニュージーランドを拓殖せしが、富源漸次開拓せられ、年と共に隆盛に赴けり。特にオーストラリアは、一、九〇一年に聯邦を組織し、本國より自治を許されたり。又、北アメリカなるカナダは、一、八六七年に、英國政府の任命せる總督の下に自治政を創めしが、次第に發達して二〇餘年の後には、カナダ横貫鐵道の敷設を見るに至れり。

ドイツも亦、太平洋方面に注目し、一、八八四年カイゼル・ウィルヘルムスランド、ビスマルク群島を占領し、其の後次第に太平洋の中央に其の版圖を廣めたり。

北アメリカ合衆國の膨脹　北アメリカ合衆國は久し

ドフトの像

ルーズベルトの像



マニラ灣海戰の圖

く内治を主とし、他國の事に干渉せざりしが、國力餘りあるに及び、十九世紀末より、其の主義を變ずるに至れり。

一、八九三年ハワイ王國に革命起りしかば、之に干渉し、後、ハワイ合併（西紀一八九八年）（明治三一年）

第十一表

西紀	日本	清	合衆國 北米	フランス	ドイツ	ロシア	イギリス
1900	(1905)ポーツマス條約	(1908)清國先帝崩御	(1901)ルーズベルト大統領	(1906)アルヘシラス列國會議	(1909)マロッコに關する獨佛協商	(1905)憲法發布	(1901)オストラリア聯邦成る
1901							
1902							(1902)日英同盟
1903			(1909)タフト大統領			(1904)日露戰役起る	(1904)アフリカに於ける英佛協商
1904							
1905							(1905)日英攻守同盟
1906							(1906)英露協商
1907							
1908							(1910)エドワルド七世崩ず
1909							(1910)南アフリカ聯邦成る
1910	(1910)日韓合邦						

合衆國イスパニア戰役（西紀一八九八年）

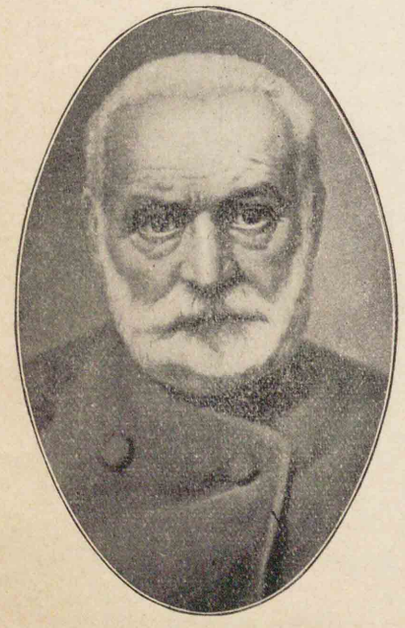
遂にこれを併せたり。是より先き、イスパニア領なるキューバ島及びフィリピン群島の人民、本國に叛きて獨立を圖れり。一八九八年合衆國之を助けて、イスパニアと戰ひ忽ちこれを破りて、キューバを獨立せしめ、合衆國はフィリピン群島及びポルトリコを得たり。ルーズベルト及びタフトは相次ぎて大統領たるに及び、共に軍備の擴張、實業の隆盛を圖り、太平洋方面に於ける合衆國の活動愈〻盛ならんとするに至れり。

第十三章　最近文明の進歩

學術の進步　最近百餘年間に於ける各般の學術は、非常なる進步をなしたり。哲學には、十八世紀の末、ドイツ

ケンラの像

カントの像



ユーゴーの像

ダーウィンの像

にカント出て、斯學の泰斗と仰がれしが、後、ヘーゲル・シェンハウエルなど出でて各一派をなし、イギリスのスペンサーまた名あり。

文學 文學には、フランスのユーゴー、イギリスのテニソンなどの大家輩出し、後、フランス、ノルウェー、ロシアなどに自然派起り、寫實の妙を極むるに至れり。

史學 史學には、ドイツ人ランケ出でて、斯學に一新生面を開き、フランスのコントは社會學を起せり。

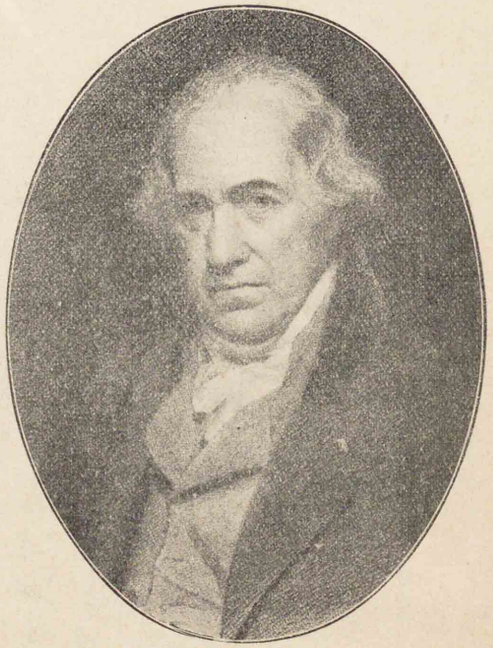
科學 また十九世紀には、理化學・數學・天文・博物・醫學等は驚くべき進歩をなせり。中にもドイツ人マイイェルの勢力不滅說、及びイギリス人ダーウィンの生物進化論は學術界に非常なる影響を與へたり。

科學の應用 科學の進歩と共に、自然力を利用する法

ガウスの像

ワットの像

フルトンの像



スチブンソンの像

蒸氣力の應用

益盛んとなり、通信・交通の機關に絶大の進歩を來せり。十八世紀の末、イギリス人ワットは、蒸汽機關を發明し、一、八〇七年アメリカ人フルトンは、蒸汽船を造りてハドソン河に浮べ、程なく英人スチブンソンは、これを汽車に應用し、一、八三〇年に、リバプール、マンチェスター間の鐵道開通するに至れり。

電氣力の應用

又、電氣力の應用は、諸種の工業・通信・交通に大なる進歩を與へたり。一、八三三年、ドイツ人ガウスは、電信の法を發明し、つぎてアメリカ人モース、これを改良して、其の利用愈盛んとなり、一、八五〇年、英・佛間に海底電線敷設せられたり。また一、八六一年、ドイツのライスは電話機を發明し、後、アメリカ人グラハム・ベル、之を改良せり。其の他電

燈・電車・無線電信等電氣の應用は益廣まれり。

貧富の懸隔

博愛事業　學術の發達と科學の應用とは、一面に人類の福利を增進し、社會の進歩を促したれども、他方には個人及び國家社會の生存競爭を激甚ならしめ、延て貧富の懸隔を大ならしめたり。されば弱者を保護し、窮民を救濟せんとする博愛慈善の事業も亦、大いに起れり。

慈善事業

慈惠病院・養老院・孤兒院・盲啞院等は各地に設置せられ、監獄の改良、免囚保護等の問題も盛んとなれり。かの戰時傷病者の救護を目的とせる赤十字社は、瑞西人ジュナンの發議により、一、八六四年ジュネーブ府にて列國會議を開きし以來、愈發達して、文明の諸國は概ね之に加入するに至れり。

近世の概括

年代　近世期は、十九世紀の初頃より、現今まで約百餘年間に亙り、凡そ我が德川家齊が將軍たる頃より、現時に及べり。

變遷　十八世紀に起れる自由平等の說は、フランス革命を起して、社會を一新し、つぎてナポレオン一世出で、一時全歐の秩序を亂し、舊制廢頽の勢を添へぬ。されば諸帝王の神聖同盟も、永く自由主義の運動を抑壓する能はず、アメリカ諸國及びギリシアの獨立を見るに至れり。十九世紀の中頃には、國民の統一運動盛んとなり、イタリアは、サルヂニアによりて統一せられ、プロシアは、オーストリア及びフランスを擊破してドイツ國の統一を完成したり。またアメリカ合衆國は、內亂鎭定以來國運益〻發達せり。

かくて列國は領土の擴張、通商の發達を競ひ、アジア・アフリカは、次第に其の勢力の下に分割せられ、遂に太平洋方面が、其の競爭の中心たらんとするに至れり。此の時に當り、萬世一系の皇室を奉戴せる我が國は、普・墺戰爭頃に維新の大業成り、國勢日に進み、日淸戰役には大いに我が武威を發揚せり。然るにロシア南下の志は、バルカン半島及び中央アジアに於て、イギリスのために妨げられ、轉じて極東經營に熱中するに及び、遂に我が國との開戰を見るに至れり。戰後、日・英・佛・露の和協成立し、世界の平和

克復せられ、我が國民の世界に對する任務は、愈重きを加へたり。

文化　最近百餘年間に、學藝は著大の進歩をなし、科學の應用盛に行はれ、各國は通商工業の發達、軍備の充實を競ひ、交通機關の發達は、列國の關係を密にし、國際的の諸會合續々開設せられ、博愛の事業も亦、盛に起れり。又、各國は教育の普及發達に勉め、女子教育も著しく進歩し、女子職業の種類も年と共に增加せんとす。されば我が國の女子たるものは、深く世界の大勢と社會の進歩とに鑑み、また光榮ある帝國の臣民たるを自覺し、益奮勵して其の任務を完うせざるべけんや。

女子**西洋史教科書**　第四年制度用　終

文部省檢定濟
大正二年二月十日
高等女學校歷史科教科用

著作權所有

明治四十五年七月五日印刷
明治四十五年七月十日發行
大正二年一月二十日訂正再版印刷
大正二年一月三十日訂正再版發行
大正三年四月十日三版發行

女子西洋史教科書（第四年用）
定價金五拾五錢
改正定價金六拾錢

著作者　富士德治郎
發行兼印刷者　岩田僊太郎　東京市下谷區櫻木町貳番地
印刷所　三協印刷株式會社　東京市京橋區弓町貳拾四番地
發賣所　目黑書店　東京市京橋區南傳馬町貳丁目五番地　振替貯金口座第二八〇九番

圖畫教育 スケッチの實際

板倉贊治先生編

墨繪の卷 全壹冊 定價金五拾錢 郵稅金六錢
色彩の卷 全貳冊 定價各五拾錢 郵稅各六錢

本書はスケッチに獨創の妙技を有する諸大家並に圖畫教育上豐富なる實驗を有する諸名家より寄稿を煩し中等學校師範學校等における生徒諸君が課外の補習用に供すべく或は日曜日に休業日に或は夏期休暇に修學旅行等に於て略畫寫生をなすべき方法又はその參考となるべき適當の材料を描寫し且これを編次せるものにしてその題目は景色風俗產物等特異なるものを敎育的に系統的に實際的に正課における圖畫科と聯絡を保ち愉快の間に尤も趣味ある寫生をなすを得べく全國各地における實景をとりて範畫となしその變化とその筆致とその描法とに至るまで示せるものなれば如何に現今の青年心理に適中しその實益多くしてその効果の甚大なること斯道諸君の定說のあるあれば弊店は敢て喋々せず請ふ諒せよ

發兌 東京市傳馬橋區南町 目黑書店

日野郡屬坂村
[illegible]田德子

[illegible]市西町[illegible]
[illegible]田德子

石川縣金澤市杉浦町 三五
柳生時文[illegible]

広島大学図書
2000080137